

---

# とあるネギのシスコン日記的ななにか？

アリストリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるネギのシスコン日記的ななにか？

### 【Nコード】

N71010

### 【作者名】

アリストリア

### 【あらすじ】

もしもネギに妹が二人いたら……もしもネギがシスコンだったらという設定で、日夜妹達を愛し続けるため頑張るネギ。

「ああ、妹達よ、僕の胸に飛び込んでおいで！」

ネギよ頑張れ！

シスコンじゃない(前書き)

息抜きです。

シスコンじゃない

突然だが、僕はシスコンではない。

もう一度言うけど、シスコンではない。

ただただ、僕は可愛い妹を愛でているだけなのだ。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ リーゼ・スプリングフィールド！」

腰まで届きそうな銀髪に目つきがちょっと怖いですけども可愛い妹が卒業生代表です。

ちょっと生意気な所がありますけども、そこが可愛いのです。

「次、アミ・スプリングフィールド！」

リーゼの後に呼ばれたのはアミという妹です。

髪の毛は肩までかかるぐらいの茶髪で、目はくりっとした可愛い妹です。

自分の気持ちに素直で可愛いと言えるでしょう。

「ネ」

ああ、僕は卒業生代表なんかじゃなく落ちこぼれですね。

どうやら魔法の才能などは妹達に受け継がれているようです。

まあ、僕としては妹達が無事に育ってくれたらそれでいいのです

けどね。

「ギ」

しかしながら可愛い妹達だと思います。

日本には、天は二物を与えずという言葉があるらしいですが、どうも僕の妹達には、天は三物も四物も与えているようです。

容姿端麗で頭脳明晰という僕の妹達、はっきり言って少し羨ましいと思ったりもしますが、妹達ならば仕方がないと割り切るほかありません。

だけでも僕は運動神経とかなどは意外と良かったりしますよ。例えば頑丈さとか。

「ちょ」

なにやら外野が煩いですが別にどうでもいいことです。

しかしながら妹達に比べて僕は容姿端麗とは言えません。

あの雪の日の事件で僕は少しカッコ悪くなっちゃいましたね、顔に少々ですが火傷がありましたね、嫌なものです。

まあ、妹達を庇ってできたものですが、妹達の綺麗な顔に傷がつかなかったのは嬉しいものですね。

「ネギ」

ついでに言うと、妹達は火傷の事は知らないのです。

普段は魔法で火傷の部分を隠しているのですよ。

アールデスカット

“火よ灯れ”の次に幻術系の魔法を覚えたのです。一日で覚えれた僕を褒めてあげたいですね。

まあ、変身魔法とでも言ってください。

「いい加減に」

火傷は妹達を庇ってできたものですが、しかしながら、妹達の父親への執念は凄いです。

軽く引けるほど凄い執念ですが、とりあえず、僕は父親を探し出し妹達にあわせてやりたいと思っっているわけなのですがね。

まあ、僕としても父親に会って、軽く頬に108発ほどぶん殴ってやりたいですよ、あと、僕は妹達を愛しているのです。

「置いていき」

しかし悲しいことに妹達は僕を嫌っているようなのです。

僕が落ちこぼれだからなのでしょう、妹達は僕の事を避けているのです。

ネカネ姉さんも雪の日の事件以来、僕を避けています。火傷の事を自分のせいだと思い込んでいるのでしょうか？

今のところアーニヤが普通に接してくれていますが、いつ避けられるか判らないので怖いものです。

あ、この学校の校長とか日本にいるタカミチもちゃんと接してくれていますよ。

「だけど」

それと一つだけ思うことがあるのです。

父親は英雄です。

皆は父親が英雄だからと言って過剰な期待をして勝手に幻滅するのは止めてほしい。

最初は皆が僕に期待していたらしいのですが、魔法の才能が皆無である事が判ると……温度差が激しいって悲しいですね。

まあ、そんな人達を見えていますから、意外と達観、というよりも

精神年齢が高くなっているかもしれません。

「いい加減にしなさああああああい!!」

「さっきからなんですか？　僕は少し考え事をしているのですが？」

「さっきからって……気づいていたなら返事ぐらいしなさいよ!」

このツインテールをしている彼女はアーニヤです。

この子はツンツンしていますけども、実はデレると可愛いのです。

「まあまあ、それで、卒業式は終わったの？」

「終わったわよ、私達以外ないわよ」

「そうですか、やっぱり姉さんと妹達は……」

「先に行ったわよ……ハイ、これ、あんたの代わりに私が受け取ったから」

少し悲しそうな表情で言うアーニヤに感謝の言葉があふれ出てきます。

しかしながら、ありがとうございますち言いたいものですが、いかんせん、僕はツンデレ属性持ちなので素直にありがとうと言えません。

「べ、別にお礼って訳じゃないけど、その、ありがとうって言いたいわけじゃないんだからね!」

そう言いながらアーニヤの頭を撫でてあげます。

アーニヤは少し僕よりでかいので、つま先で立って撫でてあげ  
のです。

「なななな、別に撫でられて嬉しいわけじゃないし、あんたのた  
めに受け取ったわけじゃないんだから、ネカネさんが恥をかくと思  
って、それでただけなんだから！」

ツンデレをツンデレで返すとは恐ろしい子です。

しかしながら、そんなツンデレあんたにはないでしょ！ そうツ  
ッコンでほしかったのですが仕方ない。

「アーニヤをからかうのは楽しい、という訳で行きましょうか！」

「……死ね！」

アーニヤがワナワナと拳を震わせながら襲いかかってきますが、  
僕は避けて学園の廊下に逃げます。

すると、後ろから恐ろしい声で、まてえええええええ！ と聞こえ  
たりしたので、アーニヤが落ち着くまで鬼ごっこが続きそうです。

「我ながら自分の頑丈さにお礼を言いたいものですね」

「ネギは頑丈すぎよ……手が痛いわ」



その後、アーニヤに追いつかれボコされましたが、僕の頑丈さが命を救ってくれました。

このようなやり取りは珍しくもなく、魔法学園に入学して以来、このやり取りをしています。

「あ……」

声が聞こえたので後ろを振り向いたら、姉と妹達がいました。なんとというか空気が微妙になりましたが、僕としては避けられるのは悲しいので仲直りをしたいです。

できるだけ明るい声を出そうと努力をしてみました。

「卒業おめでとう！ 妹達よ、何処に行くか決まったのかい？」

明るい感じで言っ たつもりでしたが、どうも無反応なのでどうしようかと考えてしまいます。

隣のアーニヤを見ると、少し苛立っている感じがするのは気のせいでしょうか？

「その、ネギも卒業おめでとう、えっと、何処に修行しに行くのか見た？」

「いや、見てませんよ、今から見てみようかと思います」

手元にある手紙みたいなものを開けます。

中からは白紙の紙が出てきましたが、すぐに文字が浮かんできました。

「えっと、日本で……ふむ、これは嬉しいですが……流石に堪えますね」

アーニヤはなんて書いてあったのか気になるようで、僕が持っている紙を覗き込みました。

「なにに、日本で……リーゼとアミの補佐をすること」

その言葉に姉と妹達は驚いたようでしたが、僕はなんとも言えません。

実の妹達の下で学べ、そう言いたいのでしょうか？ プライドと言ったものがありますけども、悲しいものですね。

「アミとリーゼの補佐って事は……リーゼ達も日本に？」

こくんと妹達は頷きました。

姉さんは少しなんと言えは良いのか判らない顔をしています。

「ネギ……その、頑張つてね？」

火傷をしている所を優しく撫でてくれました。  
幻術的な魔法を使っているので判りませんが、どうやらというより、やっぱり気にしているようです。

「頑張りますよ、それよりも、気持ちよいです、修行の地から帰ってきたら撫でて下さいね」

嬉しい気持ちで胸がいっぱいになりました。

姉さんは嬉しそうに微笑みながら首を立てに振っています。  
しかしながら姉さんと仲直りはできましたが、妹達とは無理そうです。

露骨に嫌な顔をしていますからね。どうしたらいいのでしょうか。

だが、そんな顔をしている妹達も……良い。

悩んでもしょうがないので、家に帰って卒業祝いでもしようと思  
います。

「それじゃあ、姉さん、家に帰って卒業祝いでも……」

「自分で卒業祝いって……まあ、それには賛成ね、卒業祝いをしま  
しょう」

僕の言葉に賛同してくれるアーニヤには後でクーデレ的な反応の  
お返しするとしましょう。

とりあえず、明日から大変かもしれません

ネギ・スプリングフィールドの日記1より

## シスコンじゃない（後書き）

作者「ではでは、俺はこの辺で」

ネギ「待ちなさい、貴方はやってはいけないことをしました。そういう訳でブロークンファンタズムの意味で葬り去ろうと思います」

作者「なんでイキナリ！ どうしてだ！」

ネギ「他の小説はどうしましたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて……なんて言えはいんだっけ？ とりあえず死んでください、後、感想など待ってます」

作者「え、だれかああああああ……アツーーーーー！」

さて……弟子入りしました。（前書き）

息抜き最高&意外とこの書き方は書きやすかった……他のも頑張ろう。

さて……弟子入りしました。

「はてさて、此処が日本の麻帆良学園ですか」

どうもネギ・スプリングフィールドです。

今日本の麻帆良学園というところに居ます。

僕が今何をしているのかと言うとですね。

「……此処は何処でしょうか？」

迷子になっちゃいました。

なんか駅っぽいところなんですけどね、少し歩いていたら全然判らない場所にいます。

何かでかい建物が見えます、たぶん麻帆良学園の校舎だと思うのですが……いかんせん、知識が無いので勝手に入っていいものなのか悩むところです。

それと妹達は既に麻帆良学園で教師をしています……。

ちよつと遅めの修行地です。

何故遅めに来たのかと言いますと……日本語って難しいよね！

という訳でどうしましょうかね。校長が言うには妹達が迎えに来てるらしいのですが……。

適当に歩いてしまったので、迎えが来ないと判断できます。

「久しぶりだな、ネギ兄様」

迎えが来ないと判断したとたん来ました。

しかしながら久しぶりに妹の声を聞いたような感じがします。職員の服装がとても似合ってて鼻血が出そうでした。

「リーゼ！ それにアミも！ 久しぶりですね！ こんにちは！」

僕は明るく嬉しいそうな声で妹達に挨拶をしました。が嫌そうな顔をしました。

少し傷つきましたが可愛いので許します。

「ええそうですね、久しぶりですね、兄さん、それじゃ着いてきてください、こっちです」

そう言ってリーゼは学園に向かって行きます。

どうやら僕とはあんまり話したくないようです。

アミもリーゼも昔は寂しがりやだったのに、悲しいことです。

昔ならば僕が寝ていた布団で、兄さん、兄様、と呼んで僕のパジャマを離さなかったのに。

これはとてもとても悲しいことです。

「ネギ兄様、なにをぼんやりしている？ 早く着いてきてくれ、私はネギ兄様みたいに遊びほうけているほど暇ではないんだ」

そう言っつとアミも学園に入っていました。

これは酷い。

なんというか酷いです。

僕は確かに暇人ですが、僕は遊んでなんかいません。

僕はちゃんと仕事をしていますよ、例えばアミとリーゼを盗撮したりとか。

「待つてください、置いていかないでください」

とりあえず僕は妹達を追いました。

「入ってきなさい」

「では学園長、失礼します」

ドアをノックしてリーゼ達が学園長室と思われる部屋に入ってきました。

僕もその後に着いていきます。

そして僕は吃驚しましたよ。

まさかの驚愕吃驚です。

「未確認生物だと、そんなバ……いえ、なんでもありません」

少し心が出てしまいリーゼとアミに凄く怖い顔で睨まれました。

だがそれがいい。その睨みがいい！

少し変態的になってしまいましたね、ごめんなさい。

「ほっほっほ、ワシが此処の学園の学園長、近衛近右衛門じゃ、遠路はるばる良く来たのおネギ君。歓迎しよう」

顎鬚を触りながら言う学園長に少しでも好感を持ちました。

なんとなくですが同じ、いや何か共感できるなにかを持っているような感じがしました。

「私達はこれで、行こうアミ」



「そうですね、リーゼ、早く行きましょう」

失礼しました。そう言つて妹達は出て行きました。

なんともまあ、僕と一緒に居たくないのは判りますが、兄としては悲しいです。

これは一度、何故嫌われているのか考えるべきなのでしょう？

「……随分と嫌われてるみたいじゃのお？」

「いえ、慣れてますので、それで、僕はいたいこの地で何をすればいいのでしょうか？ リーゼとアミの補佐と書かれていましたが……？」

少し学園長は難しい顔をしました。

なんというか話しくそうな顔です。

「ネギ君……ネギ君には此処の学園広域指導員になってほしいのじゃ」

「学園広域指導員？ どんなことですか？ 説明を要求します」

学園広域指導員という言葉に僕はなにがなんだか判らなくなりました。

とりあえず、学園広域指導員というのは少し嫌な感じがします。

妹達に余り会えなくなる意味で。

「ふむ、喧嘩の仲裁など犯罪行為などの取締りをしたりするのが表向きじゃ、裏は……」

「自警団みたいなものですね、判ります……で、本気ですか？ これでも僕は数えて10歳程度ですよ？」

「本気じゃ、あちらの学園長からは話を聞いておる。魔法はからっきしじゃが、身体能力がずば抜けて高いと」

ずば抜けて高いとは褒めてくれてるのは嬉しいですが、魔法がからつきしとは酷い。

それでも僕は魔法を結構覚えてますよ！ 初級ですがね……。

「……別にいいですけど、妹達に危ない真似をさせないでくださいよ？ 僕の大切な妹達なんですから……」

「いいぞい、危ない真似は極力させないようにしよう」

うむ、少しだけ信用がならないけど、まあ大丈夫だろう。

「では、学園長、最後に1つ質問があります」

「なにかね、ネギ君」

「僕は何処で寝ればよろしいのですか？」

重大な問題だ。

何処に住み何処で寝ればいいのか全然聞いていないのです。

もしもここで考えてなかった。なんて言葉が出たらプツツするかもしれません。

まあ多分大丈夫だと思いますが。

「ふむ、男子寮と女子寮が満タンでな」

「はい、それで？」

少し拳に力を入れてみましょう。

握った拳を学園長に繰り出す準備はOKになりました。

「……話は変わるが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは知っておるかの？」

「唐突ですね、一応知ってはいますよ。600万ドルの賞金首。そ

れがどうかしましたか？」

「うむ、実はな、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはこの学園におるんじゃないよ、しかも、リーゼちゃんとアミちゃんのクラスにのぉ」

一瞬この学園長が何を言っているのか判りませんでした。  
とりあえず学園長に近寄り机の前で止まります。

そして、この怒りで震える鉄拳をなんとか抑えながら問います。

「それで、学園長、なにが言いたいのですか」

「そんなに怒るでない、そのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは今や大人しくしておる。リーゼちゃんとアミちゃんには一切危害は加えんよ」

それを聞いて安心……なんてできるはずがありません。  
ですが、もしも僕の予想が正しければ。

「そうですか……それで？」

「だからのお、エヴァンジェリン……エヴァはログハウスに住んでおつてな、そこで泊まらせてもらったらどうなのかと」

やっぱりでしたか。

学園長がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは今や大人しくしておると言っていた辺りで、なんとなく予想はできてました。  
しかし、これは好都合かもしれません。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルにもしも運良く師事できれば……これはチャンスだ。

「良いですよ、では、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを呼んでください。というより、呼べ」

「これこれ、そう急ぐでない、それに、エヴァなら既にそこに居るぞ?」

学園長が僕の後ろ……ドアを指差しました。

そこには金髪の美しい少女がいたのです。

その少女からは凄まじい何かを放っていました。

俗に言う殺気というものでしょうかね?

「……なるほど、見た目で判断しては駄目ですね」

「これこれ、エヴァよ、少しは殺気を抑えんか、老体には堪えるぞい」

「ふん、その坊やはなかなかどうして肝が据わっているな……で、くそジジイ、なに勝手に話を決めているんだ?」

だんだんとコチラに向かってきます。

その少女の背が大きい感じがしました。雰囲気的にですが。

多分姿勢的な何かでかく見えるのでしょう。

「エヴァよ、落ち着かぬか、とりあえず、ネギ君を止めてやってはくれぬか?」

「私がナギの息子を泊まらせると思うか? バカだなジジイ、少しは考えて言え」

だんだんと話が進んでいますが、とりあえず僕は無言を貫きます。

話をするタイミングを見計らおうと思います。

「しかしのお、他に泊める所がないのじゃ、そこを我慢してくれんかの?」

「嫌だな……いや少し待て……これは……ふむ……」

なにやらエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは考えている  
感じですよ。

なにか嫌な感じがしてなりません、背がなんか寒いんです。これは  
一種の寒気と言うものですか？

「ふむ、条件がある」

「条件とな？ なんじゃそれは？」

「それは……坊や耳を貸してみろ」

ふむ、耳を貸せと言われました。

しかしですねエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

「耳は貸せません、何故なら取り外しができないから」

「ボケんでいいから、さっさとこっちに耳を寄せろ！」

なんか凄く傷ついたんですが、それでも少し真面目に言ったつも  
りなんです……。

でも、とりあえず耳をエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル  
の口元に寄せます。

「条件と言うのはだな……私に血を定期的に提供しろ」

「……なるほど」

血を提供しろとの事です。

少し学園長が聞きたそうにしていますが、確かに言いにくい事  
です。

まあ、学園長の前で言うともんどくさいから、という感じが凄く  
エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルからしますかね。

「……どれくらい？」

「死ぬ一步手前……と言いたいが、そこは私の気分しだいということだ」

「なるほど……良いですがコチラも条件と言うよりお願いがあります」

「お願いだと？　なんだ少しぐらいなら聞いてやる」

そういうとエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが僕の口元に耳を持ってきました。

うん、髪の毛から凄く良い匂いがします。

「リーゼとアミには手を出さないでください」

「……シスコンか？」

「違います、ただただ愛しているだけなのです」

「……このシスコンめ」

と言って離れました。

多分ですが了承してくれたと思います。

何故ならエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの顔が少しだけ微笑んでいたのですから。

ですが、その微笑が凄く怖いのは気のせいでしょうか？

ああ、姉さんと妹達よ、僕に勇気をください。

「ジジイ、交渉が成立したぞ、良かったな？　リーゼとアミには私は早退したと言っておいてくれ、行くぞ坊や」

「あ、ハイ！　学園長、失礼しました！　待ってくださいよ！　エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルー！」

学園長室から出ました。

とりあえずエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの後ろについていきます。

というよりエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルといちいち呼ぶのはめんどろなので、エヴァちゃんと呼ぶことにしましょう。

「エヴァちゃああん？」

「……縊り殺すぞ？」

どうやら気に入らなかったようです。

ふむ、気は乗りませんがエヴァンジェリンさんで手を打ちましよう。

「では、エヴァンジェリンさん」

「なんだ坊や？ 母ちゃんのオツパイが恋しいのか？」

む、母ちゃんなんて知りません！

ですが妹達のオパ……なんでもありませんとも。

「全然違います、とりあえず、何処に向かっているんですか？」

「ログハウスだ。黙って着いて来い」

と言う事で黙って着いて行きます。

そして、いろいろすっ飛ばしてログハウスに着きました。

まあ感想はなかなかどうしていいものだ。ですかね？

「ふむ、どうだ、感想は？」

「なかなかどうして……人形がいっぱいで、エヴァンジェリンさんの趣味が分かります」

「勝手に人の部屋を覗くな！」

ふむ、いろいろと勝手に見てしまいましたが、しかし良いものです。

木で覆われているので安心します。色んな意味で。

「そうそう、エヴァンジェリンさんって、なんで学園にいるんですか？」

「ん？ それは、お前の父親である、ナギ・スプリングフィールドのせいだ！」

どうやら優雅に紅茶を飲もうとしていたエヴァンジェリンさんでしたが、どうやら僕は地雷を踏んでしまったようです。

エヴァンジェリンさんの話は長いですが、とりあえず、略すと、ナギ・スプリングフィールドに呪いをかけられ現在に到ると。

なんともまあ、変な所に呪いをかけてくれた父親ですこと。

「ハアハア……分かったか坊や？」

「ハイ、分かりましたが1つ訂正させてください」

「訂正？」

「公式の記録では死んでますが、父親は生きてますよ？」

とりあえず6年前の事を語りました。

ああ、あの時の僕は黒歴史中の黒歴史ですね。

なんと言つか、今の妹達以上に父親を想ってましたらねえ。

それに、なんか話しているときに、妹達に嫌われてしまった原因ばいものを思い出しました。

まあ、それはまたいつか……ですかね？



「フ……フフフ……アハハハハハハハ！ 殺しても死なぬよう  
なやつだと思っていたが、まさか生きているとはな！ 良い情報を  
貰ったぞ！」

「で、ですね、エヴァンジェリンさん、父さんを……ナギ・スプリ  
ングフィールドを殴りたいと思いませんか？ 僕は非常に殴りたい  
です、108発ほど殴って妹達の前に出てもらい、父親面してもら  
いたいです」

「フフ……それで？ なにかなシスコン君？」

「まあ、情報料、いや、勝手に僕が言い出したんですが、その、僕  
を鍛えてくれませんか？ 108発も殴るに辺りスタミナなどが心  
配なので……よろしいかな？」

つてな訳で僕は話します。

なんかエヴァンジェリンさんは爆笑しながら良いぞ言ってくれま  
した。ですが、少しだけ血液が減る量が増えるみたいです。

ネギ・スプリングフィールドの日記2より

さて……弟子入りしました。（後書き）

作者「他の小説を書かず、なんか新しく始めてしまいました」

ネギ「+・で平等です……とりあえず他のやつも書いてください」

作者「いや、他のやつも書いているんだが……ちょっと難しいよね  
！」

ネギ「とりあえず、感想など待ってます」

リーゼとアミが心配です（前書き）

息抜き

## リーゼとアミが心配です

はてさて、昨日僕はとても大変でした。  
いえ、本当に大変でした。

裏の人達に会ったりとかしましたし、ガンドルフィーニ先生には  
何故か気に入られたり、

なにが大変だったのか、それはエヴァンジェリンさんの入浴シー  
ンの盗さ……ゲフンゲフン。

エヴァンジェリンさんの……おっと、口が滑りかけてしまいました  
たね。

けど、僕に言えることは1つだけです。  
オッパイは神が与えた芸術品ということを！

「でだ、坊や……ハッキリ言ってだな、貴様に魔法の才能是一片た  
りともありません！」

「いきなりど真中のストレートを投げてくれますね。そこは嘘でも  
才能があると言ってくださいよ」

「無いものは無い」

とまあ、今僕は別荘？　なんか時間が違う所にいます。

あれですね、何処のブルジョワジー的な姫様ですかと思いました  
ね。

だって、あれですよ？　プールがあったりするんですよ？　許せ  
ません。

とりあえずあれですね、最初入ったときに色々とやらされました。  
例えば魔法を使ったりとか、チャチャゼロというキリングドール  
と戦わされたりとか、はたまた雷の暴風などを使ってみるなど無理  
難題を言われました、どうやら魔法の検査？　才能検査的なものだ  
つらしいです。

「自分でも判っていましたか……流石にへこみますよ？」

「勝手にへこんでいるがいい坊や……とは言ったものの、格闘セン  
スはずば抜けて高いと判断できる」

「あれですか？ 魔法使いを止めて、拳闘士にでもなれと言つので  
すか？」

嫌ですよ、絶対に嫌ですよ。

だって“フランス・エクスルマティオー風花 武装解除”を覚えてみたいじゃないですか！

あの魔法は男の夢ですね。僕は光の矢など撃てません。

できる魔法は“アールデスカット火よ灯れ”と、戦いの歌と、カントウス風楯、意識をシンク  
デフレクシオ

口させて、自分の記憶を相手に体験させることができる魔法、夢や  
幻想空間を覗くことができる魔法ですかね？ 夢や幻想空間を覗く  
魔法を覚えるのに1年かかりましたよ。あと記憶にシンクロ……3  
年かかりましたが、なにか問題でも？

ついでに何で覚えているかというと僕の趣味です。記憶とかそん  
なの覚えてたら面白そうじゃないですか！

「拳闘士、いや魔法剣士になれ……坊やの場合は魔法拳士か？ ど  
ちらでもかまわんのだから」

「なれって強制！ 嫌です！」

「強制だ！ 何度も言うが坊やには魔法使いとしての才能はない、  
遠距離からの火力重視である魔法使いタイプは無理だ。が、坊やに  
は近距離重視の魔法剣士辺りが似合っている……だがまあ、私が師  
となるからには、魔法を覚えてもらうぞ」

という訳で勝手に決められましたね。なんですかこれ？ 僕泣い  
ちやいますよ？

そう言えば、今日から休みらしいです。なんでも三年生になるま  
で休みらしいです。あれですか、春休みのあれですか？

とりあえず良く分かりませんが、一週間近く休みがあるようです。  
休み〓修行〓死亡フラグ……判ります！

「という訳で、この一週間……いや別荘だから何ヶ月か？ まあ、  
そんなのはどうでもいい、坊や、貴様を強くしてやろう！」

「という訳で、僕の地獄な日々が始まりました」

「何をブツブツ言ってるんだ？」

「気のせいです。エヴァンジェリンさん」

という訳で修行風景に行ってみよう！

レッツ……アミとリーゼの写真集100万円で売っております。

修行風景的ななにか 気合だ頑張れ地獄の筋トレ

「なにをやっている坊や！ まだ300回程度だぞ！ あとスクワ  
ット1000回だ！」

「いやいやいや、無理ですって、これ以上無理です！」

「戦いの歌を使ってズルしているのだからまだ大丈夫だろう！」

なんとという無茶苦茶なことを言ってくれやがります。

戦いの歌を使っていたとしても身体能力の強化だけです。まだ数  
えて10歳の僕にはスタミナなんてないんですから

くっ、このエヴァンジェリン・ロ・リ・マクダウエルめ！

と、心の中で罵倒します。

「誰が……エヴァンジェリン・ロ・リ・マクダヴェルだあああああ  
！」

「僕の心を覗かないでくだああああああっっ！」

腹をおもいつき蹴られました。

あれです、回し蹴りを鳩尾にモロ入りました。

その上アレです。後ろに吹っ飛んでますね。非常にやばいですと  
いうより、息が出来ないです。

ドンガラガツシャーンと壁に激突した上にめり込んでしまっ  
てます。

少し気を失いそう……です……さよ……なら……

「この程度で気絶するなああああ！」

「グホオ！」

腹を蹴られて強制的に目を覚まされましたが……何か問題でもあ  
ります？ 僕にしたらあります（泣）

修行風景的ななにか2 チャチャゼロは僕のトラウマ

「ハハハハハハ！ もっと避ケナイト死ヌゾ？」

凄いです。刃物を振り回してきてるキリングドール、ハッキリ言  
って怖いです。

てか、刃物が今僕の腕を切りました！ 痛い……泣きたいく

らいです。

骨まで達してるんじゃないでしょうか！　とにかく逃げましょう！

「逃げたら修行をもつと過酷にするぞ？　茶々丸を加えるぞ？」

さて、チャチャゼロを倒すとしましょう！

しょうがないじゃないですか！　エヴァンジェリンさんの弦きが聞こえたんですよ！　鬼だ！

「イイゾイイゾ！　コレナラ楽シクナルツテモンダ！」

チャチャゼロの攻撃を頑張って避けていきます。

なんですかね、刃物なんて怖いです。

なんとか紙一重で避けていますが、前髪がやばいです。なんかおでこが少し見えちゃってます……

僕の髪の毛を返してくださいさああああい！

とりあえず怒りの正義の鉄拳、中段突きを放ちますが、綺麗に避けられ体を斬りつけられました。

そこから先の記憶がありません……想像するだけで怖い。

修行風景的ななにかラスト　魔法の授業でとある事を覚えました。

「なんで魔法の射てを覚えさせようとしたら瞬動を覚えるんだ！」

「一種の才能ですね！　羨ましいでしょう！　エヴァンジェリンさん！」



「ハッキリ言って羨ましくない」

「マスター……それも一種の才能というものだと思います」

「茶々丸……割り切るしかないか」

酷い……だがそれがいい！

とりあえず、エヴァンジェリンさんの……黒のヒモパンだと此処に記録

「……なんで魔法を覚えないんだ……私の指導の仕方が間違っているのか？ どうなんだ！」

「いや、僕にやつ当たりされてもねえ……ドンマイ！」

「……疲れた。明日の朝は修行無しだ。学校に行かないといけないからな」

ふむ、エヴァンジェリンさんは眠りたい様子です。

という訳で僕も寝るとします。

いや、別にアレですよ？ 喜んでたりしませんよ？

「……だが、帰ってきたら直ぐに修行だからな。サボるなよ？」

はい、僕オワタ！

とりあえず僕はアレですね、裏の仕事とやらをサボりまくっている、なんて言い訳しようかと頭を悩ませました。が、しかし、リーゼとアミは本当にこれで良いのだろうかと悩みました。

なにが言いたいのか、それはアミとリーゼはただただ教師という

仕事をしているだけで、本当にリーゼとアミは立派な魔法使いになれるのか……それを悩んでいるのです。

ただ教師をして立派な魔法使いになれるほど甘くはありません……そうエヴァンジェリンさんの修行を耐えていたときに思ったことです。

いつエヴァンジェリンさん級の敵が現れるか判りません……想像するだけで泣きそうです。

第一に教師をすることで立派な魔法使いになれるという事が変です。

とりあえず今は、アミとリーゼには実戦経験が欲しいところです。早急すぎるかもしれませんが、なんとかなるでしょう。

「……エヴァンジェリンさんを嚇けるか、責任は全て僕が持つという事でいいでしょう。明日相談しましょうか」

僕の血を飲んでいるので人を襲ったりはしないでしようが、またリーゼとアミに嫌われますね……悲しいことです。が覚悟をします。

とりあえず修行地なのに修行の字もしてないリーゼとアミを叱るべきか迷うところですね……今日は白とピンクでした。

ネギ・スプリングフィールドの日記3より

## リーゼとアミが心配です（後書き）

作者「色々頑張ろうね！ 展開が速いのは……まあ色々ほのぼのとくのがめんどいからです！」

ネギ「色々ってなに！ とりあえず感想をお待ちしております」

妹が可愛い……と思います 前編（前書き）

さらに息抜きー

## 妹が可愛い……と思います 前編

という訳で今日エヴァンジェリンさんが、学校から帰ってきたので相談しました。

相談したらなにやら難しい顔をして椅子に座り込み紅茶を飲み始めます。

「なんで私がそんなことを……いや、交換条件で血を吸う量を増やすが……それでもいいか？」

「大丈夫です、命の危険がなければいいです。それに、これは全て僕の責任していいです。立派な魔法使いにならなくても父親は探せますしね」

「ふむ、意外と覚悟はあるのか……ジジイからは許可を貰ったのか？」

「いえ……許可は貰えました。とても渋っていました。が、一応アレです、妹達は色んな人から期待されていますからね。僕と違ってね……だから経験を積ませたいんです」

ふむ、と頷きながらエヴァンジェリンさんは、なにやら楽しそうに口を緩めました。

なにやら少しブツブツいいながらログハウスの地下に降りていきました。

ハッキリ言ってなにやら怖いです。

数分ぐらいしてからでしょうか、なにやら茶色いロープを持ってきました。

「これを着ろ」

持っているロープを投げつけてきました。

だいたいの予想はできましたが、とりあえず言つとおりにはロープを着ます。

少しだけかいです、なんとか着れました。

「よく似合ってるな……茶々丸」

「なにか御用でしょうかマスター？」

指をエヴァンジェリンさんが鳴らすと、茶々丸さんが何処からともなく現れました。

これは一種の手品なのでしょうか？

「これを坊やの手に」

「了解しました」

なにやら丸っこいリングを茶々丸さんに渡しています。

茶々丸さんが近づいてきて僕の手を取りました。

ちょっと冷たいですが気持ちいいですね。

「坊や、茶々丸につけてもらっているものは魔法発動体というものでな？ あの小さな練習用の杖がなくても魔法が使えるようになるものだ」

少し嬉しい感じがします。初めてプレゼントされたからね。

「坊や、貴様もアミとリーゼをモチロン襲うんだろうな？」

なるほどなるほど試しているんですね。

モチロン襲いますよ。というよりエヴァンジェリンさんが嫌だと言ったら、僕一人だけでやるつもりでしたからね。

「襲います。妹達の為ですからね……妹達は、このような事を望んでないでしょうがね。また嫌われますね」

「坊やは本当に妹中心だな？　だが、そこを気に入ってるぞ、私はな」

なかなか嬉しい事を言ってくれます。

僕々確かに妹中心です。妹達が将来幸せになればそれでいいのです。まあ、今の妹達の幸せを壊そうとしている僕が思うのも変かもしれませんがね。

ですが、本当に申し訳ない感じがしてなりません。エヴァンジェリンさんに……。

口には出ませんがエヴァンジェリンさんは手伝ってくれないと思っていました。

なにやらエヴァンジェリンさんは学園内でも微妙な立場です。もし間違えれば魔法先生達から凄い反発が来ると思います。

まあ、そこを何とかして僕の責任にするのが勝負どころなのがね。最悪オコジョの刑は覚悟しています。逃げますがね。

「エヴァンジェリンさんにそう言っていたけると嬉しく思いますよ」

「っは！　言ってる馬鹿弟子が……それで坊や、何時頃に決行するんだ？」

テレ隠しですね判ります。

「大停電になる前……そうですね、2週間前ぐらいから騒ぎを起すとしましょう。今から約1週間後ですかね？」

エヴァンジェリンさんは、頷いてそのまま地下に行きました。多分別荘に行くのでしょうか、僕も着いていきます。

やっぱり別荘に入っていました。が、なにやら茶々丸さんが僕の目の前に立ちふさがります。

「すいませんがネギ先生、今日の修行は行なわない、とのこと。なにやら別荘を大幅に増築するとか言っておりまして」

なるほどなるほど、なにやら嫌な予感がしますが、とりあえず僕は地下から地上へ上がっていきます。

「とりあえず、リーゼとアミの様子でも見てきましょう……学園広域指導員もこなすのでしょうか」

そういえばリーゼとアミの補佐なんてしてないよね。

「明日菜姉様はやっぱり力強い」

エヴァンジェリンさんの家から出て30分ほど、目標のリーゼとアミを発見しました。

なにやらダビデ広場と呼ばれる場所にいましたよ。予想以上に広がったので焦りました……迷子的な意味で。

「明日菜は力だけが取柄だからじゃないのかしら？」

なにやらリーゼとアミは明日菜というツインテールをしている女性。性の事を褒めています。



少しアミは褒めているのか微妙なラインですが……。

「アアアアミイイイ！ この口は悪い口かしらああー！」

なにやら明日菜という女性は力が強く、アミとリーゼに慕われているようです。なにやらアミの口を引っ張っています。可愛いですね。

しかし、妬ましくなってきました。

「……少し妬ましいですね」

妹達は僕の前では必ずと言っていいほど、あのような態度はしません。ただただ辛い言葉ばかり言います。

まあ、そのせいで新たな境地に足を踏み込んでしまったのですがね。けど、僕の前でも少しぐらい、あの半分、いやほんの少しでもいいから……まったくもって妬ましいし羨ましい。

「ん、あの子、なんかコチラ見てる」

どうやら明日菜という女性に気づかれました。

僕はこれにて退散するとしましょう。

リーゼとアミの気分を害するのは悲しいですから。

僕は後ろを振り向き歩いていきます。

「ちょっと、なに男子が女子学の所をうろつろしてるのよ！」

どうやら退散できなくなりました。

はあ、そういえば男子禁制の女子学でした……なにやら視線があるなあと思ってましたが、まさかの女子学……やっちゃったなあ。

とりあえず、まだ顔を見られてないから、逃げるチャンスはあり

ますね。

そう思っていたらなにやら頭を捕まりました。

「えっ」

なにかパリンツという音が響きました。

凄く不味くなりました。明日菜という女性もその音を聞いたのか、吃驚しています。

ええ、自分で判ります、幻術が解かれました。一体なにが起きたんですか。

「アンタ、ちょっとこっちを向きなさい！」

強引に振り向かされました。

なんとかして火傷の跡を見せまいと両手で隠そうとしますが、ダメです、隠す前におもいきり見られました。

「アッ……ごめん」

幸い妹達は明日菜という女性の後ろにいたのでバレませんでした。が、早く逃げないといけません。

妹達も明日菜という女性に何があったのか聞こうとしています。好機ですね！

「それでは……失礼します」

どうやら妹達にバレるかもしれません。

失礼します、なんて言って逃げるんじゃないなあ、声でバレたかも……そんなことを思いながら僕はその後を後にしました。

「ネギ兄様？」

「兄さん？」

リーゼとアミの声が聞こえたのは気のせいだと思いたいです。  
どうか明日菜という女性が火傷の事を言わないでくれることを願います。

「……ツツ……ハアアアア」

深呼吸をしましょう、息を整えましょう。  
走ったときに幻術を施しましたが、大丈夫なのか心配です。  
まあ、今の僕には確認する事ができません……とりあえず、ちゃんと出来ている事を望みます。

「いったい……なにが起きたのでしょうか」

触られた瞬間に僕の幻術が解かれました。  
あれは魔法を無効化したと言えるのでしょうか？  
これは、少し不味いですね。

「チツ……苛立ってきました」

これは本当にどうしましょうか。  
とりあえずどうしましょうかね、なにやらだんだんと暗くなってきましたし、そろそろ学園広域指導員の裏でもしましょうかね。

なんか表の喧嘩の鎮圧とかしてないよね、そんな事を思ったりしたら負けです。

ネギ・スプリングフィールドの日記 4 - 1 より

妹が可愛い……と思います 前編（後書き）

作者「あれです、アスナの魔法無効化はややこし過ぎるので、まあ、  
つつこまないでください」

ネギ「まあ、」

妹が可愛い……と思います 後編（前書き）

注意……高音を少し強い設定です。

そのようなものが苦手な方は見ないようにしてください。

妹が可愛い……と思います 後編

シスコン、それは全ての兄にかせられた難題。

盗撮、それは全てにおいて犯罪的な匂いがする行為。

スーパーシスターコンプレックス、僕の事ですね判ります。

そう、これはアブノーマルを目指す僕の物語であつた！

「とか考えてたら夜ですよ……夜ですよー！」

一応僕の服装は茶色ローブの下に白と黒をベースにした服を着ています。

まあテンションが高くみえましようが、実はめっちゃ低いですね。

苛立ちとか苛立ちとか苛立ちとか、色々あるものです。

僕としてはこれから学園広域指導員としての仕事をしようと思います

とは言ったものの基本的に誰かと一緒に組んでするらしいのですが……とりあえず合流地点に行ってみましよう。

とかなんとか思っていました、止めました。

「めんどくさいですね……基本的に僕は1人で行動するのが大好きな孤高の狼なのです」

という訳で合流地点などに行きません。

だってめんどくさいのです。

今日はエヴァンジェリンさんの家に帰りましよう。

エヴァンジェリン家に出発です。

「そこのネギ先生……合流地点とは正反対の道を進んでいませんか？」

と思ったらややこしい人がきましたよ。

むちむちで腰までかかる金髪、そして黒い服を好んできている人です。

まあ、それは“ノクトウルナ・ニグレーデニス 黒衣の夜想曲”を使っているからでしょう。

いつでも戦闘が出来るようにしているのは凄いことです。  
魔力切れが心配ですがね。

「高音さんが……また僕のパートナーですか？」

そう彼女は高音・D・グッドマンという美しい女性です。1回しかやってない裏の仕事のパートナー……まあ、裏の仕事と言っても見回りで、前回は何もなく安全に終了しました。

しかし彼女の胸は僕の中では神です。やっぱり神様はオッパイという至高の芸術品を作ってくださいですね。僕は感謝しています。

「そうですよネギ先生？ よくもまあ、この一週間……サボってくれましたわね？ あなたは教員という自覚が足りません！ 判っているのですか！ そこに正座なさい！」

言うとおりに正座して座ります……石が痛いです。

しかし出会って早々と説教をしてくれる高音さんに惚れそうです。口答えすると煩いので説教を黙って聞きますよ。僕にとって説教の時間は至福の時です。

何故ならばオッパイが揺れているからですよ。

怒っているときの動作が凄いですからね！

「判りましたか！」

「はい！ 心を入れ替えて頑張りたいと思います！」



ほとんど悶えていたので聞いていませんが聞いたふりをしときましょう。

また怒られるとき悶えますからね。

さてさて、とりあえずちゃんとしようと思います。

「では、ネギ先生、行きましょう。生徒達に平和を守るために！」

「はい、生徒達の平和を守るために」

でな感じで高音さんが先導して歩いていきますのでついていきましょう。

僕は一応紳士を自称しているのでオッパイ以外は見ないようにしています……別にチラッと高音さんの下半身を見たりしてません。本当ですよ！

そんなこんなを考えていたら結構時間が経っていました。

そして今は橋にいます。

なにやら不穏な気配がします。

これを殺気でしょうか？ 高音さんは気づいてないみたいですが、僕は違います。あのキリングドール……チャチャゼロとエヴァンジェリンさんの殺気を浴びまくっていたので意外と敏感です。別に肌が敏感って事じゃないですよ？

「高音さん……ストップです。前方100m辺りに5匹の妖怪がいます、犬の形をした妖怪です」

「……」

視力を強化して見ます。

犬型の妖怪が5匹、なにやら速そうです。ちょっと肉とか削げ落ちてたりしてますから怖いです。

高音さんは黒衣の夜想曲を出します。  
ノクトウルナ・ニグレデーニス

実は途中で魔力切れになり元の服装に戻りました。  
とりあえずどうするか考えましょう

「高音さんって遠距離できますか？」

「可もなく不可もなくです」

なるほど、という訳で高音さんは遠距離で魔法を使ってもらいましょう。

僕は近距離戦をします。

やはり落ちこぼれと一緒にだと戦い方が限られてしまいますから困りますよね。

「僕が前衛をします。高音さんは後衛を、とはいっても僕は前衛しかできないので、必然的に高音さんが後衛になるのですがね、とりあえず、初のパートナー戦です、頑張りましょう」

「こちらこそ、ではネギ先生、お互い頑張りましょう……では、合図を」

「了解です……」

5匹の妖怪がコチラに向かって走ってきています。  
意外と速そうです。

「3……2……1」

「……」

距離が40mをきりました。

では、始めましょう。

修行の成果を出すときです！

「……0！」

エウオカーティオコウアキサアリルムグヨゾドアーリブーグネット

「風精召喚剣を執る戦友迎え撃て」

高音さんの呪文が完成したら戦いの歌をして瞬動で一気に距離を  
カントウス  
詰めます。

距離は約10mほどに縮まりました。

高音さんの姿をした風の精霊が一気に5匹の妖怪に襲い掛かりま  
す。

1匹は風の精霊のおかげで地面に倒れましたが、まだ健在な4匹。  
倒れた1匹はダメージが深そうですが油断は禁物です。

「……！」

「少し……怖いですね」

妖怪達は先程の魔法で散らばってしまいましたが、別に対処でき  
ないと言っわけはありません。

また瞬動で距離を詰めます。

今度は距離は0です。

「では、成仏してください！」

橋の端つこに移動した1匹の妖怪の腹をアッパー気味に1発殴り  
ます。

結果、拳は妖怪の腹を貫通、血が手につきます。妖怪は悲鳴をあ  
げて転がりピクリとも動かなくなりました。

感触が気持ち悪いですが文句を言っている暇はありません。

エウオカーティオコウロキキサアリ形ムグラデイダヤ！見セアント  
「風精召喚 剣を執る戦友捕まえて！」

高音さんの魔法が散らばった残りの3匹を捕らえようと疾走しますが、1匹だけ逃れました。

先ずは捕まつてない1匹を殺す事に専念するしかありません。

また瞬動でその1匹に移動します。

橋の真ん中とは意外と決闘精神でもあるのでしょうか？ とりあえず感激します。

「決闘を好んでるなんて感激です……ね！」

体重を乗せた回し蹴りが炸裂しまいたが、いかんせん隙がありましたので、華麗に避けられました。

「！」

「せめて言葉が判るように喋ってください！」

こんな軽口を叩いてますが意外と焦っています。

案の定、隙だらけの僕に噛み付いてきました。

まあ、そこは腕を噛ませるのですがね。

「ツツ！」

痛くて堪りませんが、チャチャゼロさん達につけられている傷よりも浅いので何とか耐えます。

「痛いんですよお！」

そのまま腕を上下に振り妖怪を叩きつけます。  
叩き付けた反動で大きく妖怪は跳ね上がりますが、どうやら追い討ちをしなくてもよろしい感じです。

ウンフエ  
「影よ！」

複数の影が浮き上がった妖怪に突き刺さります。

これはグロいです。

この妖怪は絶命。

後は残りまだ捕まっている2体です、まだ最初の1匹は地に倒れているので今のところカウントしないつもりですが、一応用心に越したことはないので……

「高音さん！ 倒れている1匹と捕縛されている1匹を御願いします！」

「任せましたわ！ ネギ先生！」

高音さんは高速で詠唱で呪文を唱え始めます。とても頼もしいです。

それでは僕は捕まっているもう1匹の妖怪を瞬動で近づき、拳で打ち下ろし頭を叩き割ります。

高音さんも呪文の詠唱が終わり妖怪達を倒しました。

安心したせいか血がベツトリとついている手を見て思わず吐きそうになりました。

「……終わりましたか」

「お疲れさまです。気分はどうですか？」

高音さんがゆっくりと近づいてきて僕に問います。

心配してくれて嬉しいです。

しかし、めっちゃ吐きそうです。

「……気持ち悪いですね、吐きそうです」

「私も最初の時は気持ち悪くなりました。それに吐きましたわ」

堂々と自分の過去を暴露する高音さんに惚れそうです。

吐くのが普通だから我慢しなくても良いということですね。

「いえ、大丈夫です……腕の治療をお願いします」

「判りましたわ……治療<sup>クーラ</sup>」

とても気持ちよいです。

しかしながら、まだまだ修行不足ですね。頑張らないとダメです。

「気持ちよいですよ、高音さん」

「いえいえ、っと、後は専門の魔法使いの人にしてもらえば完璧に治ります。それにしても」

「はい？」

「初めてにしては上出来です、良く頑張りました。ネギ先生を褒めてあげます」

とても綺麗な笑顔で頭をクシャクシャと撫でられました。見惚れました。

なんとというかネカネ姉さんに撫でられたような、気持ちよい感じ  
です。

「ありがとうございます……では、後は電話して後始末を任せるとしましょう」

「そうですね……どうですネギ先生？ 腕の治療が終わったなら御飯を一緒に食べませんか？」

にこやかに高音さんが言います。

そんなの断れるわけじゃないですかと言いたいですね。言葉にはしませんが……

「肉類は流石に食べたくないので……ラーメンなどどうですか？」

「いいですね、そうしましょうか。ネギ先生」

そう言つて高音さんは携帯電話を取り出して、後始末と治療が上手い魔法使いの先生を呼びました。

今日は色々と嫌な事がありました、高音さんの笑顔が綺麗だったので帳消しです。

追記：高音さんと一緒に食べたラーメンは美味しかったです。

ネギ・スプリングフィールドの日記 4 - 2 より

妹が可愛い……と思います 後編（後書き）

作者「高音って風系統の魔法使えるなら、こういう魔法も使えるんじゃないね？」と思い暴走した結果がこれだ」

ネギ「いや、まあ、あれですね、僕として助かりましたが、妖怪設定など、そのような事があるから批判は免れないかもしれませんがね」作者「覚悟しています……あと影よ（ウンブラエ）なんですけどね……こういう風な魔法なのか忘れちゃったので、想像で描写しました……どうか教えてください。影よ（ウンブラエ）とはどういう魔法なんですかあああ！」

ネギ「そこは頑張ろう……では、感想などをお待ちしております」



妹と兄と妹大全集 前編（前書き）

息抜き

展開がはやああいから注意

## 妹と兄と妹大全集 前編

「な……なんということだ！ 僕が大事に取っておいた妹大全集が無くなっている！ それに、リーゼとミアの写真集（パンツ編）までが！」

「ネギ先生、それでしたら、今朝、マスターが燃やしました」

「なん……だと……」

どうもネギです。

妖怪犬と戦い家に帰ってバタンキューしたネギです。

朝起きて妹大全集を見ようとしたら無くなってました。とりあえずエヴァンジェリンさんに苦情を言いたいです。

しかし朝から僕の大切なコレクションが昨日のうちに燃やされていたという事を聞いてショックです。気分はブルーですが、僕のハートもブルーです。

人生の半分を消失したような……僕って何のために生まれてきたのでしょうか？

とりあえず、エヴァンジェリンさんが座っている机の前にいって紅茶を入れてもらいました。もちろん茶々丸さんにですけどね。

ふむ、紅茶美味しいです。

「坊や、朝から私は貴様を弟子に取った事を後悔してしまったぞ。なに、人生の半分以上を消失したなら作り直せばいいじゃない……、い

や、作らないでくれ」

「人の心の声を……、僕は悲しんでいるんですよ？ あの写真集（パンツ編）をどれだけ歳の月をかけて作ったと思っているんですかっ」

「1ヶ月程度だろ？」

「……作ります！ そして1年ですよ！ 1年かけて作ったんですよ！」

ああ、僕の汗と涙と嫌われの結晶が、Gubbai。

そのエヴァンジェリンさん、なんかこいつはもう駄目だみたいな顔をしないでください。

「……私の半径4m以内に近寄るな」

「露骨に引かないでください。悲しみます」

なんか僕は悲しくなってきました。普通でしょ？ 兄として妹の成長過程を記録するのが当たり前でしょ！ それに心の汗が目から出てきました。

まあ、エヴァンジェリンさんは笑いながら冗談だと言ってくれたので、悲しみは減りましたがね。

そんな話をしていたら学校に行かなければいけない時間がやってまいりました。

エヴァンジェリンさんと茶々丸さんは鞆を持って出かけようとしています。

「では坊や、留守番せず適当にぶらついているがいい。行くぞ茶々丸」

「では適当にぶらついててください、行ってまいります。ネギ先生」

僕の心の汗を華麗にスルーしてエヴァンジェリンさん達は学校に

行こうとしています。

ちよつと鬼畜ですロリータです。

まあいいです。何故ならまだイギリスには僕のスペシャルなりー  
ぜとアミの写真集が6冊ありますから。別に痛くも痒くもないもん  
ね！

「ええ、行つてらっしゃい！」

エヴァンジェリンさんは片手を上げて返事してくれます。

茶々丸さんも茶々丸さんで、一度こちらに向き直り頭を下げてエ  
ヴァンジェリンさんの後に続いて出て行きます。

「……僕も行こう」

とりあえず僕は、妹全集を買いに行きます……。  
もちろん18禁のほうですよ！

「それじゃあ、部屋に行き準備『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、  
兄様、大好き、大好きだ、大好き、大好きだ』おっと、携帯が」

胸ポケットに入れている携帯が鳴りはじめました。

意外とこの着信音を気に入っています。ついつい長く聴いてしま  
いますので危ないです。この着信音は化物か！ とでも言いたいで  
す。

そろそろ出るべきでしょうか、かれこれ1分ほど鳴っています。

「はい、こちらネギ・スプリングフィールド改め、シス・コンリン  
グフィールドです。どちら様でしょうか？」

「……朝からテンション高いのおネギ君」

どうやら学園長のようでした。

何の用事なのでしょう？　くだらない理由だったら怒ります。  
というより妹大全集を買いに行くのを邪魔したのは万死に値しますよ！

「まあとりあえずじゃの、昨日は良くやってくれた。流石はネギ君じゃのお」

「違います。シス・コンリングフィールドです」

「……さりげなく気に入ってる？」

「いえ、なんとなく言ってみただけです」

そう言ったら学園長が深い溜息をはきました。  
電話越しから聞こえたので間違いありません。

とりあえず僕は自分の部屋に行きます。もちろん携帯を片手で持っていますよ？

「なんか疲れるぞい……それでじゃ、ネギ先生」

「なんですか？　僕はこれから妹大全集（18禁）を買いに行かなければならないんです。邪魔したら万死に……いえ、すでに万死に値しています」

部屋につきクローゼットからジーパンと白のワイシャツを出します。  
もちろんワイシャツは胸元を開けて見せびらかしますよ？　見られるってなんか良いじゃないですか？

「ひどっ！　それより妹大全集など未成年が買うもんじゃないぞい。  
……それは置いて、ネギ君、3-Aの副担任をしてみない？」  
「……妹達が担任のクラスですね？　却下です」

用事というから何かと思えば、とりあえず即答します。

なんでワザワザ妹達が楽しんでいる担任生活を邪魔しなければいけないんですか。まあ、壊そうとしている僕が言っても説得力ありませんが。

流石に嫌いな兄が妹達が担任をしているクラスの副担任……妹達はストレスマッハですね！

「早！ もう少し考えてくれはせんかのぉ？」

「論外です、いえ、場外です、そんなのリング外にポイです。妹達は僕を嫌っているのは学園長も知っているでしょう？」

「確かに知ってはいるが……じゃがネギ君、仲直りしたいとは思わんか？」

説得してくる学園長がウザイです。激しくうつとうしいです。

僕はジーパンをはき終えて部屋からでます。

「仲直りしたいとは思いません。今の状態が妹達にとってベストだからで……いや、しょうがないですね、学園長。ちよつと質問があります」

これはチャンスかもしれません。

いえ、別に副担任になったりしませんよ？ 学園長から僕が聞きたい情報を聞き出します。

「よかるう。ワシが答えれる事なら答えよう。その代わり副担任になつてくれるか？」

「学園長しだいです。それじゃあ3-Aに明日菜という女性はいませんか？」

イキナリ学園長がちよつと黙りました。

何故黙るのが分かりませんが、とにかく聞きたいので追求します。

「で、いますか？」

「……確かにいるが、どうかしたのかのお？」

「なんとなくです。では、もう1つだけ質問です。今のところリーゼとアミは誰かに魔法をバレたりしていませんか？」

また言葉に詰まりました学園長。

この反応から見て、3・Aの誰かにバレている可能性があると思います。いましたが、予測ではこの程度です、とにかく聞かなければ。

「早くしてください学園長！ このままでは妹大全集が売切れてしまいます！」

「妹大全集から離れんかい！ 明日菜ちゃんにバレとるぞい！」

なんか怒鳴られました。が別に気にしません。

それよりも、なんという事でしょうか。

とりあえず学園長に言っておきます。

「OK、流石は学園長と言っておきます、が、しかし、僕は副担任になりません」

僕はログハウスが出て瞬動で妹大全集がある隠れた名店に行きます。

もちろん人がいないような所でひっそりと建っていますから、売り切れの心配はいらないんですけどね？

「……どうしてもダメ？」

「ダメというより嫌です、妹達のストレスの権化とも言える僕が副担任になったら……想像するだけで」

「ふう〜、しょうがないのお、ではもう1つ用事があるんじゃない。聞いてくれるかの?」

学園長はしつこいです。略してしつこさんです。

まあ、それは置いて、とうとう妹大全集が売っている店に着きました。とても古臭いです。

「いいですけど、ちょっと切りますね。10分ほどしたらかけなおしてください」

「ふむ、では10分したらかけなおすでしょう」

ぴつと切りました。

それでは店に入ります。

店内は怪しそうな物をいっぱい売っています。

小さなグリコの人形というやつから白黒テレビ、変な色をしたピン、新しく出た雑誌などがいっぱいあります。

「おや、いらつしゃい。今日は何をお求めかな?」

銀髪の若い店主が出てきました。眼鏡をかけていますが伊達眼鏡です。この前聞きました。

商売するつもりがあるのかなのか微妙、ですがこの人が扱っている商品は最高にいいものばかりです。



「妹大全集とグリコの人形……それとこの前をお願いした物を」

「妹大全集かい？ また買うのかい？」

「ええ、燃やされました」

「懲りないね、その壺に腰をかけているといい、この前、君が頼んだものを持つてくるよ……しかし、君はシスコンだね。いや、通り越して犯罪者にならないことを祈るよ」

案外口が悪い店主です。

僕の事を心配してくれるのはいいことですが、少し悲しいですよ。それに犯罪者になりません。

壺に腰をかけてそこら辺にあるものを見てみます。

とはいったものの何か面白そうなものはありません。いえ、ありました、なにかやばそうな感じがしたので無視します。

「はい、持ってきたよ」

店主が持ってきたものを見て、僕の胸はときめきました。

まさか、これほど綺麗に再現されている物を店主が作れるとは思ってませんでしたから。

「作るのに苦労したよ……しかし、君は妹達の1/1スケール人形なんてどうするんだい？ はじめ写真を見せて作ってくれと言われたときは吃驚したが」

そう、僕が店主に頼んでいた物。それはリーゼとアミの1/1スケール人形。

僕は猛烈に感動しています！

「いえ、抱き枕にするだけです……そこ、引かない！」

店主が引いてます。  
なんか引かれてばかりです。

「ま、まあ、趣味は人それぞれだしね。えっと、全部で5690円になります」

「はい、釣りはいいりません！」

かつこよく店主に1万円を出します。

店主の目が輝きました。お金に目がない店主ですこと。

妹人形を脇に抱え最速でエヴァンジェリン家のログハウスを目指します。

「ありがとう、それじゃあまたのご来店を」

出て行くときに店主の声が聞こえましたが、返事をする暇はありません。口にグリコ人形と妹大全集が入った袋を咥えているからです。ついでに瞬動で移動中です。

あ、ついでにこの名無しの店である店主は、魔法側です。  
なので瞬動などしても驚かないのです。

「『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、兄様、大好き、大好きだ、大好き、大好きだ』ほふもふき！」

10分が経ったのでしょうか。  
携帯が鳴っています。

とりあえずもう少しなので無視してログハウスを目指します。

「『お兄ちゃん、兄様、お兄ちゃん、兄様、愛してます、愛している、愛してます、愛している』むう！むうむうふき！」

着きました！

パパッとログハウスに入り、僕の部屋に移動します。  
妹人形をベッドの上において袋もベッドの上に。

「……………　　っはぁ」

深呼吸を1回だけ。

あとは胸ポケットにある携帯を取り出します。

「お兄ちゃんも愛しています……………違いました。学園長ですか？」

「何を言っておるのだ。では、用件を聞いてくれるかのぉ？」

つつい着信音のお兄ちゃん大好きコールに返事をしてしまいました。

ダメですね、僕はどうも妹達が……………ああ、僕の体を駆け巡る妹達の愛は日々日々増えていますよ！

「うちの孫と　　」

「だが断る！」

「えっ！」

切ります。

学園長の電話番号を着信拒否に設定。科学の力は素晴らしいと思うわけです。

「　　悪は滅びました……………そろそろ行きますかね」

妹達を盗撮をしにね！

お兄ちゃんスキルは伊達じゃない！

ネギ・スプリングフィールドの日記 5・1より

## 妹と兄と妹大全集 前編（後書き）

作者「あと3話ほどしたら本編に入りますか？」

ネギ「僕に聞かないでくださいよ……困ります」

作者「いや、まあ、展開が速いから批判が怖いw」

ネギ「だがそれがいい！ という訳でDM作者に代わりまして感想をお待ちしております」

妹と兄と妹大全集 中編（前書き）

展開あいもかわらず早いので注意してください。

## 妹と兄と妹大全集 中編

「いい匂いがする、盗撮は後でしようかな　　だけど盗撮のほうか……けど良い匂いだし……腹が減っては戦はできぬ、うん、食べに行こう。お金はまだまだありますしね！」

という訳で着きましたよ！

麻帆良学園中等部にね！

ですが麻帆良学園中等部に着くのに8時間かかりましたよ！　べ、べつに良い匂いに釣られて店をあっちこっちら行ってただけなんですから！

ごめんなさい、迷ってました。

あつちにふらふら、こつちにふらふらとしていましたら、いつの間にか意味不明な所にいました。何故かでかい木の所にいましたよ。流石に吃驚しましたね。

「……既に下校の時間ですか、これは早く帰らないと駄目ですね」

着いて早々に帰るというのは僕のプライドにかかわりますが、妹達＋　に見つかるわけにはいけません。

＋　は魔法先生とエヴァンジェリンさん達です。

とりあえず、中等部前の入り口から出なければいけません。

「お兄ちゃんスキル発動！」

お兄ちゃんスキルとは108式まであり、今は47式のステルスお兄ちゃんを発動しているのです。

フッフッフッフ……僕は今やステルス状態ですね！ まあ、何故か故郷ではモロバレでしたが、今回は大丈夫でしょう。

「では、バレないうちに帰りまし」

「兄さん、そこで何をしていらっしやるのですか？」

いきなりバレました。何故バレたし！ しかもアミにバレましたよ！

「久しぶりですね、兄さん？」

挨拶してくれています。嬉しいです。

しかし相変わらず美しい！ 茶色い髪にクリっとした目、プルンと柔らかそうな唇！

神は天と地とを創造されたと言いますが、これはまさに神が与えた究極の美！ ああ僕のエンゲル係数……エンゲル係数は意味はありませんが、とてもBeautifulです！ 数えて10歳なのに11歳ぐらいの少女に見えますよ！

とにかく動揺せず返事をしないと駄目です！

「Long time no see」

「……」

ミスりました。ありがとうございます。

動揺を隠そうとしたら逆にもっと動揺してしまいましたよ！

これは、恥ずかしすぎるので逃げるが勝ちです。

お別れの言葉を言え方がいいのです！



「Let's meet again soon」

「落ち着いてください」

駄目でしたああああああ！ しかも空気に逃げられませんよ  
おおおおお！

ここは落ち着こう落ち着いて落ち着こうよ！

ああ、妹の目の前で動揺してしまう僕はなんで……

「ええつと……僕は、その、あはははははははは」

「なにを動揺していらっしやるのですか？ それよりも兄さん、どうしてこのようなところに？」

どうしようか、これは危ないです。本当の事は言えません。  
言ったら殺されます。

しかし無愛想です。やっぱり僕の事を嫌っているのでしょうか。

あの明日菜さんという人の前では凄い笑顔でしたが、僕の前では……。

今の嫌われ方からすると、さらに嫌われた場合は無愛想どころか、話しかけてきてくれないでしょう。もしくは兄弟の縁を切られる可能性が……。まあ、嫌われる原因をそのうち作るので、憂鬱になりそうですよ。

とまあ、落ち着いてきたので普通に言葉を発します。

「いえ、少し学園広域指導員としての仕事をしようかと思ひまして」「へえ……学園広域指導員になっっているんですか？」

なにやら意外そうな顔をしています。

僕が仕事をするの珍しい事なのでしょうか？

とりあえずこの憂鬱な気分をなんとかしたいです。

「私は今から学生寮に帰るつもりです。そういえば兄さん」

「え、えっと、なにかな？」

駄目ですね僕って、なんでこんなに緊張してしまうのでしょうか。それに罪悪感がヤバイです。

「兄さんは何処に住んでいるのですか？」

これはなんと返事をすればいいのでしょうか？ これは……言えません。

もしエヴァンジェリンさんの家に住んでますなんて言ったら……エヴァンジェリンさんが魔法関係者という事が判ります。

いや、リーゼとアミは、そもそもエヴァンジェリンさんが吸血鬼で賞金首という事を知っているのでしょうか？

多分……知らないでしょうね。リーゼとアミも少しだけ天然が混じっていますからね。どうせ名前が同じですねえとか、その程度ぐらいしか思っていないでしょう。

「ええっと、タカ……ミチのところで住まわせてもらってます？」

とっさに出た嘘でしたが大丈夫でしょうか。

というより、普通ならバレるような棒読みで言ってしまったのでヤバイですね。

「どうして私に聞くのですか？ それよりも、高畑先生にご迷惑をかけないようにしてくださいね？」

普通にいけました。

人を疑う事を知らないのでしょうか？ まあ、数えて10歳にな

る妹に疑う事を知れというのが変でしょうが、これは将来が心配です。

というより疑う事を知っている僕が変なのかな？　やはり僕の精神年齢が……気にすると悲しくなってきました。

「兄さん、少しき」

「アミー！　なに先に帰ろうとしてるのよ！」

「アミ！　なに一人で帰ろうとしているのだ！」

なにやら聞いた事がある声が聞こえました。

ツインテールをしている女性、明日菜さんとやらです。そして妹のリーゼ。すぐアミの後ろに居ましたよ。これはやばいです。これは非常にやばいです。

アスナさんとやらには火傷をした顔を見られましたが、今の顔を見られてバレル可能性があるかもしれません……リーゼとアミには絶対にバレてはいけません。それに明日菜さんとやらがもし僕の想像通りならば、僕の幻術を消してしまう恐れがあります。

「では、そろそろ失礼しま『ん、アンタ確か……』さようなら！」  
「ちよつと兄さん！　話がまだ終わってません！」

アミが怒鳴っていますが今は無視です。

というより明日菜さんとやらに案の定バレましたよ。火傷の跡がないのに良く判りましたねと言いたいですが、言えません。というより幻術で火傷の跡を隠していますが、幻術なしだと普通に別人のはずなのに、何故判ったし！　まあ、髪の毛の形と色で判断したのでしょうか。後、身長とかで。

全速力で走ります。走りながら小声で呪文を唱えます。

カントゥスベラークス  
「戦いの歌っ！」

「このまま何とか逃げます。」

一応速さは制限して、一般の高校生より少し速めのスピードで逃げています。判りにくければ50mを6秒辺りで走っていると思うてください。

そして戦いの歌って便利ですね！ そのうち戦いの歌の上位を覚えたいところです。

「何で逃げるのよ！ 待ちなさい！」

なにやら明日菜さんとやらの叫び声が聞こえましたが、無視します。

そして、ある程度走りました。先程の場所から1kmほど離れたまじだでしょうか？

後ろを振り向き追ってきてないことを確認します。

「追ってきていま……したよ！」

ツインテールの明日菜さんとやらが追いかけてきます。

逃げの一手ですね！

「僕の速さは世界の記録を超えますよ！ 着いてこれるものなら着いてくるがいいです！」

ちよっとスピードを上げて走ります。

これなら大丈夫でしょう。絶対に追いつかれません。  
しかしドドドドドという凄まじい足音がだんだん近づいてきて  
います。

そつと後ろを振り返りますと。

「つうかあまえたああああ！」

なにやら白い息をはきながら僕を捕まえようとしている明日菜さ  
んとやらが居ました。

はい、捕まりました。

それも頭をがっしりと掴まれてね！ 幻術も解けました！ それ  
もアミとリーゼまで200m付近まで迫ってきているではありません  
んか！

「離してください！」

「嫌よ！ なんで逃げるのよ？ 話をしたいだけなのに？」

後にしてください！

とにかくリーゼとアミに見られたら終わりです！

というより頭が痛いです強く握りすぎです。握力ゴリラ並ですか！

「とにかく離してください！ 離して！ 離せよ！ アミとリーゼ  
に顔を見られたら駄目なんだ！」

そう言うとき明日菜さんとやはらは離してくれましたが、逃がすつも  
りはなさそうです。幻術が間に合うか微妙です。

とにかく頭を下げて幻術の呪文を唱えます。というより変身魔法  
ですがね？

このくそがつくほど長い呪文はめんどくさいです。

「明日菜姉さま！ ついでにネギ兄様！」

「2人とも足が速すぎます。それより兄さん、いきなり帰るとは…  
…怒りますよ？」

ハイ終わりました。

僕の人生終了です。確実に嫌われました。

「ネギ兄様、俯いて何をしているのですか？ 早く頭を上げなさい。  
兄がこのようでは私達が恥ずかしくなります」

アミの苛立ちの声とともに肩を捕まりました。

「ネギ兄様、アミの指示に早く従ってくれ。スプリングフィールド  
の一族である長兄が俯きながら独り言を呟くとは、言語道断だ」

リーゼまで苛立っていますね。僕は泣きそうです。というより涙  
が少しかけ出しました。もう呪文を唱えられませんので、唇を噛み締め  
るほかありません。

リーゼとアミは雪の日の事件以来、スプリングフィールドの血に  
誇りを持っていますからね。このような不出来の兄が許せないの  
でしょう。他にも理由はありますけどね。

ああ、あれもこれも全ては父さん……いや、僕のせいかな、いけま  
せん、全て父親のせいにかけてました。

しかし僕はリーゼ達のために生まれてこなかったほうがよかった  
のかなあ。

兄として妹達の役に立ちたいですが、とても悲しいです。

「兄さん、いい加減にしてく」

「リーゼにアミ！ 言いすぎよ！ この子に用事があるから先に帰  
ってて！」

原因を作った張本人である明日菜さんとやらが言ってくれました。いえ、良く考えれば原因を作ったのは僕でした。夜以外はもう麻帆良学園中等部には近寄らないようにしましょう。

しかし意外と優しいんですね、この明日菜さんとやらは？

「しかし明日菜。私も兄さんに用事があるのです」

「そうだ、明日菜姉様。私もネギ兄様に言いたい事がある」

やっぱり反論しますよね。

申し訳ありません。思考がネガティブ方面に……。

「駄目よ！ 貴方達の言葉は酷く辛辣だわ。少し冷静になりなさい」

そう言うとき明日菜さんとやらがいきなり手を掴んで走り出しました。

僕は吃驚しましたが俯きながら大人しく着いていきます。

後ろのほうでリーゼとアミがなにやら怒鳴っていましたが、僕にはどうすることも出来ませんでした。

ネギ・スプリングフィールドの日記 5 - 2 より

妹と兄と妹大全集 中編（後書き）

作者「頑張ろう」

ネギ「どうしたの？」

作者「無茶苦茶すぎ」

ネギ「把握」



妹と兄と妹大全集 後編（前書き）

ちよつと更新スピードはよいかな？  
明日菜ファンにはキツイ？

妹と兄と妹大全集 後編

テンションが下がりに下がっている僕は手を引かれるまま着いてきました。

火傷の跡を隠す気力さえありません。

ですが、なんというかですね、リーゼ達にちょこつと言われただけで、こんなにも精神的にきついなんて思いもしませんでしたよ。僕のハートはガラスのハートなんですかね？

仲直りがしたいですよ本当にね。ですが無理ですからねえ。やっぱり原因は雪の日の事件、あの時、僕が……。

「そんな所でボーっとしてないでこっちに来なさいよ」

明日菜さんという人の声が聞こえました。

どうやら目的地に着いたらしいです。

僕はボーっとしていたらしく、自分が立ち止まっている事にさえ気がつかなかったようです。

少しだけ周りを見渡します。どうやらとてもデカイ木があります。

「辛気臭い顔をしないで、こっちに来なさい」

このでかい木の根っこ？ というのでしょうかね？

そこに明日菜さんが座っています。

とりあえず手招きされているので、明日菜さんという人の隣に座ります。

なんというか、少しだけ落ち着いてきます。明日菜さんという人は何か不思議な人です。

「よしよし、私の名前は神楽坂明日菜、明日菜でいいわよ、よろしくね？ えーっと」

「ネギです。ネギ・スプリングフィールドと言います。ネギでいいので、こちらこそよろしく願いします」

フルネームは神楽坂明日菜というのですか。

明日菜さんとお呼びいたしましょう。

しかし、なにやらネカネ姉さんに似ていますね、リーゼ達が懐く理由が判ります。

「それで、ネギ、いくつか聞きたい事があるのだけど、いいかな？」

「はい、お答えできる事ならお答えします」

まあ何を聞いてくるのは予想はできます。

十中八九ですが、妹達と仲が悪いのか、その仲が悪くなった理由でしょうか？ あと火傷の傷の事とかかな？

「どうしてリーゼとアミと仲が悪いの？」

「僕は妹達を愛していますが、アミとリーゼはどちらも違うようです。ね。なんというか、バベルのタワーが崩壊するぐらい嫌われているすね……」

嫌われているのでしょうか、悪ければ憎まれているみたいな感じなのかなあ？

「例えが全然判らないわよ」

「明智光秀が謀反を起こして織田信長を討ち取るぐらい嫌われています」

「判りやすすぎて困るわね」

明日菜さんは今の発言で少し汗をたらしています。  
今ので判るなんてね、意外と頭は良い？ まあ、僕よりは良いでしょうね。

「そこまで仲が悪いのか……ふむふむ、それじゃあ、どうして仲が悪いの？ 理由は判る？」

「色々と理由がありすぎて困りますが……一応確認を取りますが、明日菜さんは魔法に関わっていますね？」

そう言ったら何やら驚いた顔をしています、そんな事はどうでも良いのです。

「もしかして、知ってたの？」

「ええ、リーゼとアミがミスってしまいバラしたと、そう話には聞いています」

「そ……そうなんだ」

なんか落ち込んでいます。どうも彼女はこちら側に足を突っ込んだことを再確認しているのですね！ と僕は判断します。

「まあ、今は別に魔法に関わっているとかどうか意味無いんですけどね？」

「別に良かったのかい！」

スパーンと頭を叩かれました。

力が余り入っていないので全然痛くないですがね。

「それで、理由を聞いてみたいんだけど、あ、別に答えにくいなら言わなくていいからね？」

「はは、お優しいですね、まあ、なんというか、そのお、すいませんが言えません。妹達に聞いてください、僕に言う資格はありませんので……リーゼとアミなら明日菜さんが頼めば見せてくれますよ、記憶を」

「……ごめんなさい その、魔法って何でもありね」

「何でもじゃないですけど、多少の事なら何でもできますよ」

明日菜さん黙りました。

なんというか僕は最低ですね。

ですが、これでリーゼ達に頼れるパートナーができる可能性が出てくるのです。

リーゼ達には頼れるパートナーが必要です。明日菜さんには悪いですが、どつぷりとこちら側につかってもらいます。リーゼ達の将来と幸せのためです。

多分ですが、明日菜さんが聞けばリーゼ達は多少嫌がるかもしれませんが記憶を見せるでしょう。それぐらい信頼していると思います。

リーゼ達の記憶を見てもらい、そして引けないところまで行ってもらいます。

少しだけ話して明日菜さんの性格は大体判ってきましたが、明日菜さんは必ずリーゼ達をほっておけないはずです。早く言えばお人よしなのです。

だから、本当にごめんなさい。声に出せれません。これもリーゼ達のためなんです。

僕は妹のためなら悪魔に魂を渡したっていいのですよ。もしも地獄という所が本当にあるのだとしたら、その地獄に僕は落ちるでしょうね。

とりあえず、僕は場を盛り上げるため、話題を振ります。

「それで、なんの話でしたっけ？　僕がガラパン派かブリーフ派か

の討論でしたっけ？ 僕はガラパン派です」

「……そんな話してないわよ！」

「違いましたっけ？ ああ、思い出しました。タカミチはズボンの下にパンツを穿いているか穿いていないかという論議でしたね」

「えっ！ 高畑先生ってパンツ穿いてないの！ って違うわよ！  
なんか疲れてくるわね！ それじゃあ最後、その火傷の跡はどうやってついたの？」

どうやら話が進みそうです。

火傷の跡ですか……そうですね。此処は真面目に言っておきましよう。

「妹達を守るためについた勲章ですかね？」

まんま正直に言いました。

この火傷の跡は雪の日の事件の時に妹達を守ってできた跡なのですよ。

左のおでこから左頬の近くまでビッシリと、とても醜いものです。実際にですね、左目はほとんど見えていません。魔法のお陰で少しだけ、ほんの少しだけ見える程度です。ついでにエヴァンジェリンさんは火傷の事を知っていますよ？

「ねえ、ならどうして妹達に黙っているの？」

「妹達がいらぬ罪悪感を持つかもしれないからね、言ったら言っただけ仲直りできそうですよ、僕はそのような事で仲直りを望んでいません」

「そうなんだ……その、ごめん」

謝られたって困ります。というわが謝らないでください。罪悪感がやばいですから。

胃が痛くなってきましたよ。

「いえ、それより明日菜さん」

「えっと、なに？」

何やらとても罪悪感でいっぱいです私っていう顔をしています。

「そろそろ僕は帰りますので、火傷の事は黙っててくださいね？」

「も、もちろん黙っとくわよ！」

「そうですね、なら僕もですね、今日は明日菜さんが熊パンだという事は秘密にしておきますね」

そう言った瞬間、明日菜さんは目をパチクリとさせた後、怒りはじめましたので、僕は逃げる事にします。

はてさて、明日菜さんのお陰でテンションが戻ってきてくれたのではっちゃんけす。

それでは明日菜さん、今度は月が輝く夜に出会いましょう。

ネギ・スプリングフィールドの日記5・3より

妹と兄と妹大全集 後編（後書き）

作者「ちよつと更新スピード速いかな？」

ネギ「どうなんでしょう？ それよりも妹っていいよね！」

作者「いいよねえ……」

ネギ「では、感想をお待ちしております」



外伝 魔法発動体を改造してみた（まじで外伝です……小ネタかも）

「どうして……エヴァンジェリンさん……どうしてなんですかつ！」  
「なにを言っているんだ？」

「どうして……どうして妹人形を……そして妹大全集をまた燃やしたんですかああああああっ！」

「……それを自業自得」

鬱です。じゃないですね。ネギです。

どうも今日起きたら妹大全集と妹人形が燃やされていました。3  
日間の間抱きまくっていましたが、酷いです。

やはりイタズラでグリコ人形（小）をエヴァンジェリンさんの部屋に飾るもんじゃないですね。多分これが理由で燃やしたんでしょうね。

まあ、そんなこんなで妹達を襲う日になりました。

ついでに僕は今、別荘の中に居ます。アレですよ、エヴァンジェリンさんが別荘を増築を完了させたんですよ。

そして城の中に居るのですが、いいですね、まるで王様気分ですよ？

「そつえば、坊や」

僕の目の前で食事をしているエヴァンジェリンさんが僕に問います。

という訳で、僕は僕なりの答え方をしましょう。

「なんですか？ キティちゃん？」

なにか黒いものが横切ったと思ったら、魔法の矢でした……何か問題でも？

余裕ぶってますがオシッコちびりそうですよ？

ついでにキティというのは、とある人から教えていただきました。なにやらクウネル・サンダースという方でしたが、なかなかの妹道を歩かれています。本人は妹はいませんと言ってましたが、良くあそこまで妹道を歩けたものです。

クウネル・サンダースという方は、あの古い店にたびたび来たりしていますですよ。

「いえ、冗談です……なんですか師匠<sup>マスター</sup>？」

そうそう、最近ですがエヴァンジェリンさんから、師匠<sup>マスター</sup>と呼ぶように厳命されました。

なんでも師と弟子という関係がなんとかかんとか言ってましたが、無視していたので忘れしました。

「言葉を選ぶんだな、……それでだ、とてもさっきから気になっていたんだが、その首輪はなんだ？ 何故首輪をつけている？」

エヴァンジェリンさんが僕の首元を指します。  
なるほど、“これ”が気になっていたということですか。

「これは……魔法発動体です」  
「はっ？」

やっぱり固まりましたか。

僕がつけている首輪、なにやら囚人がしそうな鉄製で10k以上はある首輪です。

そしてこれは魔法発動体。

「私があげた魔法発動体は？」

「えっ？ さっきエヴァンジェリンさんが指を指したじゃないですか？」

「……指輪だったはずだが？」

うむ、もつともな質問ですね。

これができた理由……それはですね。

「魔法発動体の指輪って溶けるかなって試してみたら」

「ほうほう、それで？」

「溶けたんで、ちょっと手を加えたら首輪になっちゃいま

し……た……師匠お願いだからね、落ち着いてください。マジでこめんなさい、許してください、お願いします。もうしませんから元に戻しますから！」

エヴァンジェリンさん止めてください。

なんですかそれ、エクスキューションーソードですよ！ お願います許してくださいよ！

エクスキューションーソードを首筋にあてないで！ 死ぬから死ぬからあああああ！

別荘で4日間のあいだ磔の刑に処されました……。

磔中にステーキを目の前で食べられたのがムカつきました。

ネギ・スプリングフィールドの日記外伝1より

外伝 魔法発動体を改造してみた（まじで外伝です……小ネタかも）（後書き

作者「ふうー」

ネギ「磔されている人間の目の前で焼肉しないでください」

作者「うめえ」

ネギ「死んでください」

作者「ついでに首輪はアレです……うたわれにでてるカルラの首輪です……次回の本編から魔法発動体は指輪ではなく首輪になるので注意を」

襲うはずが仲間はずれだった……そして新たな道へ！（展開速いけど気にしない

さてやってまいりました！

あと1時間……あと1時間でございます！ 茶々丸さんが言うには後1時間で此処を妹達＋明日菜さんが通るようです。

テンションが上がってきた！

そしてフフフフフ……僕は判りました。判りましたよ！ 重要なので2回です！

なにが判ったかと言いますと、僕がシスコンであるということを！ 漢字にすれば妹魂です！

そうです、僕はシスコンという事を認識して、また妹達へのLOVE度が、愛しています大好きです度が上がったという事ですよ！  
そう、それは僕のピュアな愛が昇華して、新たな領域へ行っただですよ！

「なに悟りを開こうとしているんだ……戻ってこい、坊や」

「いえいえ、ただ僕は妹達への気持ちを昇華しているのですよ、ええ、べつに悟りは開いていませんよ」

「微妙に開いてる、微妙に開いてるだろ」

ふふふ妹達をこれから襲おうと思うのですが、あれですね、妹達が涙目で地に這い蹲っている姿を想像するだけで……そう、めっちゃ興奮しますが、これも愛なのです！

そつえば僕は今ですね、エヴァンジェリンさんと桜通りで待ち伏せ中です。ついでに僕は顔を隠しています。仮面でね！ だって、明日菜さんも襲うんだもん！ 幻術を無効化されて、妹達に火傷を知られるわけにはいきませんからね！

あ、無効化するかも知れないということは、エヴァンジェリンさんにも話していますよ！

とりあえず僕はエヴァンジェリンさんにパツチーンってな感じでウインクしちゃいます。

「……坊や、１回だけ死んでくれ」

なにか、コイツはもう駄目だ、明日の朝になったらお前は豚肉になっっているんだね、まるで養豚場の豚を見るような冷たい目ですが……これはまさかの！

ツンデレ！

僕のウインクでデレたのをツンで隠しているつもりなのでしょう……これは実に美味しい！

「死んでくれ……なるほど、それは僕への愛と受け取ってもよろしいんですね！ はっはっはっは、そうですね！ 死んでくれないと！ ふふふふ良いですね！ 良いですね！ 死んでくれ！ 妹になり僕に愛でてくれと、そして可愛がってくれという事、ああ、僕はなんて妹思いなんだ！ どうですか、エヴァ、僕の妹になった感想は！」

「いや、本当に死んでくれ、というよりそのテンションは止める。気持ちが悪い！」

いやはや無理でございますよ、このテンションはあれです。シスコンですから仕方がないことなんですよ！ それにしてもウザいと思うってそんな顔をしています！ 僕はそれが見たかったですよ！ 心の中でガッツポーズ！

エヴァンジェリンさんの額に青筋とやらが浮かんでいますが、別に気にしません！

「よし、私が許そう、死ね！」

「はっはっは、テレヤですね！ というより心の言葉を覗かないで

「！

少しだけやばそうな雰囲気！ とにかく頭を右にチョコツとずらします。

すると、轟！ という風を切る音と共に何かが僕の頬を掠めていました。

あれ、おかしいな？ 仮面を被っているのに頬から血が出てるよ……。

「ちつ……次は外さんぞ。私が許可するまで頭を動かすな」

これはこれは、とてもお怒りのようです。

ふふふ、だがその顔もまた美しい！ ですが命の危イイ機イイ！

「はっはっはっ！ 調子に乗ってました……本当にごめんなさい」

妹達を襲うという事で少しテンションが上がりました。いや、襲う事にはちょっと抵抗がありますけども、しょうがない事です。

普通ならテンションが下がるでしょうが、僕の場合は上がるのです。まあ、ポジティブシンキングとやらですね！ あ、何をするんですかエヴァンジェリンさん！ 手を首に！

首が絞まる！ 首が絞まるから！

「坊や、襲うからと言ってだな、無理やりテンション上げるのはどうかと思うぞ？」

僕の首を絞めながらニコヤカに言わないでください！  
死ぬう、マジで死んじゃ……う……。



「意識を失ったか？ まあいいか、襲い終わるまで寝とけ。今回は私だけでいい」

という声を聞きながら意識を手放しました。

「おはよう、坊や。襲い終わったぞ？」

「おはようございます」

どうやら僕は気絶していたようです。というより展開の速さに頭が追いつきません、とりあえずわかったことは襲い終わっているということだけ。

ああ、それだけ判れば問題ないでしょう！ ふっ、流石はエヴァンジェリンさん、やりますね！ しかも起きたら別荘でした！ えっと、城の中ですかね？ 内装的に。

周りを一度見てみますと、シャンデリアとベットしかありません……うん、ここは城の中にある僕の部屋ですね。

「いやはや、すいません。襲おうと言った僕が……恥ずかしいかぎりです」

「いや、なに、坊や、貴様は良く役立ってくれたさ、恥じる必要はない」

なにやら嫌な不穏な、僕にしたら最悪な事をしでかされた感じがします。

というより今気づいたんですけど、頬が痛いです。仮面が微妙に

割れてます。それと幻術も！

「……えっと、なにかしたんですか？」

「少し盾になってもらった。魔力を封印されていると改めて実感したよ」

「どうやって盾にしたんですか？ 気を失ってたはずなんですが？」

「それはだ…… フフフフ、人形使いである私が、人間を操れないなんて事はない」

凄く良い笑顔で言われました。

これは悲しむべきなのでしょうか？ それとも役に立ったことを喜ぶべきなのでしょうか？

「……なんか僕の扱い酷くないですか？」

「気のせいだと思うぞ？ それより私は腹が減ったぞ、茶々丸」

エヴァンジェリンさんが指を鳴らしたら、今まで居なかった茶々丸さんがいきなり現れました。

なんとという瞬間移動！

「マスター。すでに用意はできております」

「さすがは私の従者だ。坊やの分も用意しているだろうな？」

「マスターがそう言うと思って、ちゃんと用意しています。それではこちらに」

という訳で城の中にある食堂に僕とエヴァンジェリンさんと茶々丸さんは向かいました。

何回見ても城の中の食堂は無駄に豪華です。

なんですかね、この無駄に長いテーブルと無駄に一杯ある蠟燭、そしてシレッと部屋の隅っこにある荒縄と蠟燭とムチ……なにに使

うんだ！ めっちゃ気になります！

「では、そちらにお座りください、ネギ先生」

と言われ茶々丸さんが言った席に座ります。

気になりますが……頑張って気にしないようにしましょう！

「……おお、これはまた豪勢ですね」

目の前にはステーキに寿司、そしてあっさりしてそうなサラダ。  
そしてジャパニーズお刺身！

なんというか、美味そう！

「はい、今日は豪勢にしてみました。マスターのお金ではないので……  
それでは私はこれで」

茶々丸さんがそう言うてくれました。そして一瞬でどこかに消えました……なにそれ怖い。

それは置いて、エヴァンジェリンさんのお金じゃないからですか。納得ですね！

「それでどうでしたか？ リーゼとアミは？ あと明日菜さんは？」  
「……神楽坂明日菜は少しだけ及第点だな、頬を6発殴られたぞ……  
坊やが」

僕かよ！ とツツコミをいれたいですが話をちゃんと聞きます。  
頬が痛いのはそのせいですか。

あ、このステーキ美味しい。

「リーゼとアミは私の予想通り……魔法は撃つが、全て教科書通り

のようなものだった」

なるほどなるほど。

あ、師匠、僕のおかずを奪わないでください！

「良いと思ったところは、対応が早かったところだな」

僕の大事な誇れる妹ですから当然でしょう。

しかし、良いところということは、駄目なところもあるのでしょう。まあ、当然でしょうね。駄目なところは大体予想できますがね。しかし、荒縄とムチが目に入って……

「駄目だと思ったところは……坊や判るか？」

「……あ、それは正体がエヴァンジェリンさんだと判ったら魔法を撃つのを止めた……正解じゃないでしょうか？」

リーゼとアミは優しいので自分の生徒だと判ると魔法を撃ってこないだろうと予想しています。

何故判っているかって？ 僕がお兄ちゃんだからですよ！

「流石は兄だな、それぐらい予想できてたという感じか？ それでだ……坊や、アミとリーゼは何の魔法を使える？」

「えつとですね。2人とも同じ属性が使えて、同じ魔法を覚えていきます。今覚えているのが風楯、デフレクシオ・フランス・パリエウス・ステイ・ウエルチメ・タイ・スエリ・アー・ロランス・エクスアルマ・ティオー風花旋風風障壁、風陣結界、風花武装解除、光と風と雷の魔法の矢、風精召喚系統、あとは、フルグラティオー・アルピカンス白き雷戦闘用だとそれが全てですね。我が記録に偽りなし！」

「はいはい、それで、それらの魔法は学校で習うのか？」

学校で習おうもの……だったはずですよ。

うる覚えですね、記憶力が余りない僕は妹達の“保険”で卒業さ

せられたようなものなのだから。

「まあ、うる覚えですけど魔法学校で習います」

「そうか、もう少し自主的に色々な魔法を覚えてそうだと思ったんだが……しかしあれだな、坊やは戦いの歌カントゥスを習得しているが、やはり自力で習得したのか？」

「そうですね……5年前ほどから練習し始めて、去年の春ぐらいに習得しましたね……僕の周りにはリーゼとアミばかりに期待していたので、落ちこぼれである僕には全然で、自力で習得するのには骨が折れましたよ」

そう、去年の春ぐらいに僕は戦いの歌を習得しました。全てリーゼとアミに期待がね、僕は落ちこぼれでしたから、あまり先生方に相手にされませんでした。というよりあまりじゃなく相手にされてなかったです。

落ちこぼれは、相手にしないみたいだな？ まあ、不良的な扱いと思ってくれて構いません。まあ、校長は可愛がってくれましたがね。という話は置いて、戦いの歌って今では簡単に出来てますが、覚える前は大変でしたよ。

戦いの歌がちゃんとかかっているのか判らないから、でかい木の上から落ちたり、湖を泳いで試してみたりと……あれはめんどろった。

「流石は私の弟子だ。私も最初は魔法を覚えるのに苦労を……おつと、話がズレたな。ふむ、次リーゼとアミを襲う時は 坊やだけでやってみろ」

「無茶すぎます。僕に死ねと言うのですか？ というより何故？」

「妹中心の坊やが、リーゼとアミを襲えるのか、それを見たい。あとはそうだな、坊やの力だけでリーゼとアミは倒せると思ったからだな」

なんという悪趣味な！　と言いたいところですが、まあ、今回はなにもしていませんので、拒否権はないでしょう。

あ、ごちそうさまでした。御飯が美味かった！

「……茶々丸さんもつけてくれませんか？　明日菜さん専用で」

「……神楽坂明日菜が出てきたときだけだぞ？」

「ありがとうございます、しかしですね、正体がバレたらどうしようかな」

「べつに正体がバレたって構わん。妹達に嫌われる覚悟してるんだろ？　なら見られたって良いじゃないか」

確かにそうなんだけど、まあ、遅かれ早かれバレるのは確実ですからね。

少し気を引き締めないと駄目ですね。頑張ります。

「そうですね、なら、襲うときは素顔で……それより師匠」

「どうした坊や？」

「さっきから気になっていたんですけど」

「なにかあるのか？」

先程までシリアス的な話をしていたので空気が重いですが、これはどうしようか。

話をしている気になって仕方がないものがあります。それは、荒縄とムチです。

本当に気になって、本当に仕方がない！　ですが言ったらなにか、そう、僕の大切ななにかを失い、新たな道を開きロードそんな感じがしてなりません。

チラリと荒縄とムチがあるところを見ます。そしてエヴァンジェリンさん……どうしよう。言えない。

「あ、いえ、なんでもないです」

「さっきからなにを見ているんだ

？」

興味があるのか

僕の目線を追われエヴァンジェリンさんにバレました。

なんというか少し嬉しそうな、ニヤニヤしています。そして手が危ない動作をしています。止めて、そんな笑顔で僕の顔を見ないで！

「いえ、全然興味ありません！」

「そうか、試してみる気はないか？」

「……全力で拒否させてもらいます！」

「そうか、残念だ……」

とても残念そうな顔をしています。言うならば捨てられた子犬のような顔です。

僕は絶対に騙されませんよ！

「それじゃあ見せてもらおうぞ？」

「期待しないでくださいね？」

期待されるプレッシャーって凄く重いから嫌です。

まあ、とりあえず別荘を出てリアルタイムの明日頑張ってみますか！

あと、夢の中で僕が荒縄で縛られてエヴァンジェリンさんにムチで叩かれる夢を見た。

少しだけ新たな道を開かれた感じがしました。

とあるネギのシスコン日記的なにか？6より



襲うはずが仲間はずれだった……そして新たな道へ！（展開速いけど気にしない

作者「鬱だ」

ネギ「バツカジャナイノオ？」

作者「冗談さ」

ネギ「次回、妹達と兄の騒動、もしよかったら感想……くれたらいいなあ？ というより、ネギまの本がなくなってるから判らん」

## 妹達と兄と昔の夢と騒動（早いから注意）

『頼む……逃げとくれい……』

気づいたら目の前で、だんだんと石化していくスタンおじいちゃんの姿があった。

またこの夢か、そう僕は思った。

『どんなことがあっても、あやつの子供を守る、それが……死んだあのバカへのワシの誓いなんじゃ』

もし神様が本当に居るならば酷いことをしてくれる。

どうしてこの夢を見させるのか、大体想像はつく、けど、僕はどんな事しても、どんなに時間が流れても、忘れないとそう誓っているはずなのに……。

村が業火に覆われ、家は瓦礫の山とかし、優しかった村の人たちは燃えたか石化したか魔物に食い殺されたのか……僕には判らないいや、判っているのは極少数の人たちだけだ。1つずつ場面が変わっていく

酒場でいつもニコニコしてて、怒ると怖い、ユーおじちゃんは悪魔の魔法によって石化していた。

隣に住んでいた僕と同年の友達である、ミール君は燃えて黒くこげて、最初はミール君だと判らなかった。

少しだけ乱暴だけど、ナンパとか妹達は愛するものだと教えてくれたマク兄ちゃんとマクお兄ちゃんの妹であるはユミちゃんは魔物に食われていた。

そして村の人たちの中で、妹達にとって僕にとっても特別な存在であったスタンおじいちゃんは僕のせいで完璧に石化してしまった。

僕のせいで姉さんは足を石化してなくしてしまった。

なのであの時僕は、湖の前でじっとしていなかったのかと、この夢を見るたびに後悔してしまいます。

じっとしていたら姉さんの足が無事だったかもしれない。

そうしてらスタンおじいちゃんが僕を庇って石化しなかったかもしれない。

妹達がスタンおじいちゃんが僕を庇って石になったところを見られなかったかもしれない。

僕もこの火傷を負わなかったかもしれない。

そんなもしもIFの事ばかり、この夢の中では考えてしまう。

そして、また場面が変わる。

『お前が……ネギか』

小高い丘、村を、全てを飲み込む業火が村を覆っている場所が見える小高い丘。

フードをかぶった男　父さんから姉と妹達を守るために小さな練習用の杖を顔に火傷を負った僕が構えている。このときの僕は気づいてなかったんだよな。

父さんがだんだんと近づいて、僕を、小さな僕を撫でてくれる。

あの時の感触は今思えば、とても気持ちよく、今にでも目の前のフーの男に抱きついて泣きたくなるような、そんな感じだった。まあ、父親というのを直感的に判ったのかもしれないだろうけどね。

『この杖をやろう。俺の形見だ』

小さな僕に父さんは杖をくれた。けど違うんだ、僕はこんなもの

がほしいわけじゃないんだ。ただ僕は

本当に、もし夢の中で僕の体を自分で動かせるのなら、喋れるのなら 父さんに言いたい事がある。

だけど、そろそろ終わるようだ。周りが明るくなってきて、そして……。

「なにを眠っているのでしょうか、ネギ先生」

その一声で僕は夢から覚めた。

周りを見渡すと誰も居ませんでした。頭上を見ると桜の木より少し上らへんに居る茶々丸さんが見えました。

どうやら起こしてくれたようです。

「あ、待ち伏せしてたら眠くなってきちゃって……ごめんなさい」

凄く嫌な夢だった。

なんというか鮮烈に覚えすぎていて気持ちが悪いです。

妹達に……我ながら悲しい夢です。

さてと、テンションを上げていきましょう！

「あと3分と17秒したら、此处をリールゼ先生達を通ります」

そういや、エヴァンジェリンさんが襲撃してから4日経ってました。

そしていきなりだけど茶々丸さんってハイテクすぎじゃないでし

よ  
う  
か？

だって指パッチンでエヴァンジェリンさんの下に直ぐに駆けつけ  
るとい  
う機能 転移系の魔法ですか？ そう思いましたよ。

まあ、色々は無駄な事を言ってますが、これも暇つぶしです。

「それにしても寒いですね」

僕は今桜通りで妹達＋明日菜さんを待ち伏せ中です。何処に隠れ  
ているかって？ 桜の木の天辺らへんの木の枝です！ さっきから  
ギシギシと音を立てているので枝が折れそうですよ！ そして寒い  
あれですね。フードを着ていますので顔をほんの少し隠せます。  
あと首輪がやっぱり重い！ 魔法発動体を外したい！ フードの下  
にはＴシャツとジーパン……軽装です。

「この襲撃が終えれば、家に暖かいスープを作ってあげますので、  
もうしばらくご辛抱ください」

「それは、楽しみです……あ、リーゼ達が来ました。それでは、  
出て行きますので、明日菜さんが邪魔してきたらお願いします」  
「了解しました。では、ご武運をお祈りしています」

カントゥスベラークス  
「戦いの歌」

さて、リーゼ達のためです！ 嫌われようが嫌われまいが、頑張  
りましょうか！

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン」

桜の木の上から飛び出してみました。もちろん小声ですよ？

リーゼ達御一行は少し嫌な表情をします。そりゃそうでしょうね

……。

フードで頭を隠しているの大丈夫だと思いたいですが、少し怖い。

「あんた……この間の　エヴァちゃんの盾！」

明日菜さんの発言にコケかけました。

まあ、明日菜さん達の印象だとそうでしょうね。

気絶していたので判りませんが、エヴァンジェリンさんが盾として使った僕を明日菜さんが6発ほど殴ったと言っていましたよね。

「私の名前はアミ・スプリングフィールド！　あなたの名前は！」

おうおう、いきなりアミが自己紹介し始めましたよ。

これは怖い！　というより何で自己紹介をするんですか！　しかしこれは答えないと妹魂に傷が……しかし、本名を名乗るわけにはいきません、偽名を使いますか！

「僕の……僕の名前は」

少しだけ焦らします。というより裏声になっているのでめんどい。

そして偽名を使いますか！　と心の中で強く思っても、肝心の偽名がねえ……どうしよう。

うーん。1回だけ学園長に使ったあの名前を言いましょうか、少しだけ改変してですがね！

「僕の名前は、シス・コリングです。お見知りおきを！」

胸をはっておもいきり言います！ そのとき頭が軽くなりましたが知りません！ ここは最強にかっこよく言わなければならなかったのです！

「……あんたネ『おつと、あそこにUFOが！』 ちょ、あな『私の名前はシス・コリングです！』 いや、さすがに無理があるわよ」

流石は明日菜さん、一発で判りましたかつ！ そこ明日菜さん呆れない！

それにしても、なにやらリーゼとアミも呆れているんですけど、何故でしょう？

「兄さん……何をしているのですか？」

「ネギ兄様……兄妹として恥ずかしいぞ？」

「なあ！」

な……何故バレたし！

声も完璧に裏声のはずなのに、なんでだ！

くつ、流石は妹達、たった1回見ただけで僕だと判るとは、ちい、僕の妹達は化物か！

「なんで判ったんだ！ 完璧に顔を隠してるに！」

「……ネギ兄様が偽名を名乗ったときフードが脱げたんだ」

「まさか、ちつ、やるな！ 妹達よ！」

まさか僕が偽名を名乗ったときに魔法で脱がすとは……恐るべし！

「いや、勝手に脱げたわよ、ネギ」

僕の心の声が判っているかのように、明日菜さんが説明してくれやがりましたよ！

明日菜さん、丁寧な説明ありがとうございます。

まさか最初からバレるとは予想外です。

少し茶々丸さんがいる場所を見ます。

なんですか茶々丸さん、その呆れた表情は、とても馬鹿にされている感じがします。

「それで兄さん、これは何の冗談ですか？　怒りますよ？」

アミは少し怒っているようです。

「ああ、うん、これはあれです、秘密です！」

「ふざけないでいただきたい、ネギ兄様、本当の事を言ってくれ」

リーゼ、そういいながら身構えるのはいいですけどね、人払いの結界を張ってないので……まあ、どっちでもいいです。

というよりエヴァンジェリンさんは正体が判ったら魔法を撃つてこなかったと言っていました、僕の場合では多分ですけど違うようです。

「ネギ」

明日菜さん、その、まるで、そう、あれです、姉のような早く言うてみたらって顔は止めてください。

なんというか、とても言いにくくなりますので。

「とにかく秘密です　秘密が聞きたいならば、そうですね、僕に勝ったら教えてあげますよ」

「……では『駄目、兄妹で争いなんて駄目よ』明日菜姉様……しか



し」

「しかしもだつてもないの、兄妹なんだから、まずはちゃんと話し合いなさいよ、ね？」

あら、これは、リーゼ、引き下がるのですか、どうしましょうか、いらんところで邪魔が入りましたね……ここから心攻めタイムに入るうかと思ったのですがね。

ふむ、やれやれ、茶々丸さんに頼んでみましょうか。

「茶々丸さん、お願いできますか？」

これだけで茶々丸さんに判るはずです。  
本当にすいませんね。茶々丸さん。

「え、ネギ、なに言っ 茶々丸さっ！」

「了解しました、ネギ先生……すいませんが明日菜さん、私の相手をお願いします」

茶々丸さんが降り立ち、無防備の明日菜さんに突っ込みリーゼとアミから引き離します。

さて、最初はアミとリーゼを精神的にボロボロにしてですね、その後戦います……リーゼとアミが泣いたら終了ですけどね。

ネギ・スプリングフィールドの日記7

妹達と兄と昔の夢と騒動（早いから注意）（後書き）

作者「息抜きタイム」

ネギ「他の小説って詰まってるからね」

作者「そういうことお」

ネギ「胃が心配です」

僕って独善者かな……

「人生はホニヤラララアである」

「どういう意味よ？」

「意味なんてないですよ、明日菜さん」

「ないんかい！」

突然の事でリーゼとアミは固まりましたが、直ぐに頭が働いたのか、激怒した表情で僕を睨んできます。

なんというか、リーゼの前髪越しからの目つきが怖いぐらいにキリツと僕に向けてきてます。

アミも同様に、くりつとした目が怖いぐらいつり上がっています。

「ネギ兄様！」

「兄さん！」

アミとリーゼは僕に切れてる時は良く判りやすいのですよ。

絶対に最初、『兄さん』『ネギ兄様』とだけ言うのです。

他の罵倒などは本気で怒っていない証拠です。

ポイント兄さんと兄様の辺りが震えてる感じですかね？ 怒っ

ているときのポイントです！

ですので完璧にプツンしています。が、直ぐに元の調子に戻ってもらいます。

「怒ってても、冷静になることです。スプリングフィールドの血筋がこの程度で頭に血が上るなど、恥を知りなさい、ほら、深呼吸を

してください……」

そう言う但至少だけアミとリーゼは冷静になってくれました。スプリングフィールドという名をだせば1発で冷静になります。まあ、ブツンさせた僕が言うのもあれですがね。

しかし、スプリングフィールドという言葉を使うのは、とても嫌です。ウェールズの周りにいた魔法先生達みたいだから。

しかし、2人とも素直に深く深呼吸して落ち着いてますね。

一通り冷静になってくれたので、こっからは質問タイム！  
心を責める前に質問タイムです。

「さて、それでは質問です……アミにリーゼ、日本、いや、麻帆良学園に来て、魔法の修行をしましたか？」

答えは判ってますけど質問してみました。してないでしょうね  
兄妹でしかわからないぐらい、ほんの少しだけ動揺しています。  
それと、質問している時の態度ですが、凄く怒っていますという  
感じで声を出しています。

「……なんで答えないといけないんだ。ネギ兄様が秘密にしている  
のに、もしもネギ兄様の秘密を教えてくださいるならば、答えてあげて  
もいいぞ？」

動揺しています。というよりビクッとしています。

流石は僕ですね。お兄ちゃんは怒っていますオーラが出ているんですね！

ふふっ、アミとリーゼは怒られた事があんまりありませんでしょうからね、効果は抜群なのですよ。

という訳で、少しずつ言っていきますか。

「判りました。なんのために修行しにきたんだかね」

少しだけですがアミとリーゼの雰囲気が変わってきましたよ。

なんというか、そう、言葉に表すのならば、子犬です！ 泣きそうな感じの子犬ですね！

やばい、テンションが上がってきましたよあ！

おっと、自重自重です。

「ちっ、呆れてなにも言えませんか、アミにリーゼ……スプリングフィールドならばです、自主的にも修行の1つや2つやっていなければいけないというのに……それでも僕の自慢の妹ですか？」

僕が舌打ちをした瞬間、アミとリーゼの肩がピクリと動きました。予想通りですね。

しかし、なんですかね、テンションが上がると同時にですね、僕の繊細かつピュアなガラスのハートが傷ついていくのは気のせいでしょうか？

というよりスプリングフィールドを使つての質問って嫌ですよ。

「兄さん、その、一体なにが言いたいのですか？」

少しだけですが、声を震わせて聞いてきます。

ああ、アミは泣きそうですね。リーゼも少し涙目になっています。今の状況から推測するに、兄に初めて怒られているような感覚？

そのような感じなのでしょうかね？ ふふ、姉にも周囲の人にも怒られたことはないのだから……。

おっと、冷静に冷静になろう。

「それは後で答えてあげます、では、もう1つ、アミにリーゼ、こ

の答えは判りきっていますけども聞いておきます、ただ仕事を、教師という修行をして立派な魔法使いになれると思っているのですか？」

これ重要です。

アミとリーゼの事ですから、教師をすればいい、それだけで立派な魔法使いになれると思っているのでしょうね。

だから優等生は……と、思ってしまったのは秘密。

とりあえずそれは、ズバリ言って甘いです。

ティラミスにハチミツと餡子をつけるぐらい甘いです。

裏の仕事、早く言えば僕がやっている仕事ですが、もしも、リーゼとアミがやれば直ぐに死ぬだろうと、エヴァンジェリンさんが言っていました。

何でもエヴァンジェリンさん曰くですね、精神　心が弱いかららしいですね。

心が強くないと駄目だとか、僕の心はアミとリーゼよりも弱いはずなんですかねえ？

ガラスのハートなのに何故でしょう？

それにしても、リーゼとアミが裏の仕事ができるようになるまでに何年かかるか判ったもんじゃありません。

それまでに、リーゼとアミが魔法を忘れてしまっただけでもこうもありませんか。

まあ、そこら辺は学園長がなにかしら指令でも出してなにかしらさせたりするのでしょうか……学園長の判断は遅いのです。

ちらりと僕は茶々丸さん達を見ます。

アミとリーゼの後方30m辺りでは、茶々丸さんとアスナさんが戦っています。

お互い1歩も譲ってないですね。

というより明日菜さん……桜通りの木をですね、素手1発でメキメキと折らないでください。怖いです。

茶々丸さんも茶々丸さんで、なんですかあれ？ 足を強く踏み込むだけで地面にあんなクツキリと足跡が残るもののですか？ どちらもバケモノ並の筋力ですね！ 茶々丸さんは性能が凄いと言えはいいのかな？

「それで？ どうなんですか？」

だんまりして答えてくれません。

というより、僕の考えが当たっていたようですね。

しかし 普通に反論できるような事をバンバンと言っているのに、なんでなにも言わないんでしょうか？

それにしてもあれですね、僕って独善者ですかね？

「アミにリーゼ、僕でさえですね、とある人と師弟関係になり修行をしているというのに……そのような甘ったれた考えならば、立派マキな魔法使いになるものではありません」

だいたいですね、立派な魔法使いになったら、粉争している所とに行かなければならないのに、教師をするだけでは駄目です。

教師だけじゃ……粉争している場所など行けるはずもございません。

せめて実戦形式の戦闘など、または実践経験が豊富な人から色々学ぶなどしないと、粉争が起きている場所など、行く事など無理でしょう。

せめて着任して直ぐにでもですね、魔法先生の師事するべきだと思います。

高音さんでも師事している人がいるんですから……誰かは知りませんけどね。魔法先生の誰かでしょう。

しかし、これって9歳児が言う言葉じゃないですよね。  
うん、理不尽ですよねアミとリーゼにしたらすけどね。

「さて、先程のアミの質問ですけどもね」

この場だけ一瞬の沈黙が降ります。

なんというかこの場だけがですね、別次元にあるような感じです。  
少しずつ近づいていきアミとリーゼの目の前に立ちます

「今すぐ荷物をまとめてウェールズに帰りなさい、そう言いたいの  
です」

仕方がないことなのです。

どうか妹達よ……泣かないで。

「ぐすっ」

「ひくっ」

期待を裏切って泣いちゃいましたね。

戦闘シーン入らずして泣くとは

これは戦わずして勝つという事なのでしょうかね？

泣いたら終了にしますと思っていましたけど……これは、まあ、  
いいのでしょうか？

しかし、泣いてる姿を見ると、とても慰めなくなったりしま  
す。

妹達の目からは止める事などできないほどの涙が流れて、地面に



シミをつくっています。

その泣く姿がとても綺麗で、僕がしている事は間違っているのかという考えが一瞬だけ頭によぎりましたが、頭を横に振り否定します。

とりあえず、どうしようかな。

「うえっ、ごめっ、ごめんな、ひくっ」

流石は妹達だ。泣き方がシンクロしている……。

はてさて、兄としては慰めたいところですが……ここは明日菜さんに任せましょうか。

兄なので慰め方などは色々ありますが、泣かせた本人が慰めるといふのはねえ。

それに。

まあいいや、茶々丸さんと明日菜さんはまだ戦っています。

茶々丸に合図を出すため指で音を鳴らします。

こっ、中指と親指でね。

「茶々丸さあーん！ 家に帰りますよぉ！」

「了解しました。少々お待ちください」

指を鳴らした瞬間、茶々丸さんの動きは凄いものでした。

右手で殴りかかっている明日菜さんの手を掴み、一瞬にして投げました。

なんというか、明日菜さんが1回転して地面に倒されました。

日本の武術である、合気道というものののでしょうか？ いや柔術なのかな？ そちら辺は判りませんがとても凄いです。

明日菜さんはとても苦悶の表情ですね。

まあ、僕の何回も投げられたりしてますから、あの痛さは判りま

す。

息ができないうえにあの背中にくる痛さ……。

「明日菜さん大丈夫でしょうか？ すいませんが、今日はこれにて失礼します」

そう言って茶々丸さんは僕のところに近づいてきました。

何故か僕の顔と妹達の顔をジーっと見つめて茶々丸さんがとある事を言ってくれました。

「戦わずして勝ってしまったという訳ですか」

なんともまあ状況把握があることでしょうか。

それはそれで嬉しいのですけどね。

「ネギ先生、リーゼ先生達をこのままにしておくつもりなのでしょうか？ 流石にリーゼ先生達に敵しすぎではないでしょうか？」

などと言ってくれました。

いや、僕だつて慰めたいんですけどね？

僕が慰めたら意味無いじゃないですか。

「大丈夫ですよ、明日菜さんが慰めてくれます」

「そうですか……ですがもう少し優しくするというのは駄目でしょうか？」

なにやら茶々丸さんが僕を説得しようと色々と言っています。

どうしてそんな事を言うのでしょうか？

僕にどうしろと？

妹達の将来の幸せのために、妹達が望む未来を実現させるために、

妹達の願いのために、それが僕が望んでいる事です。  
そのためには、今は耐えてもらうしかないのです。

もしも、妹達が立派な魔法使いを止めるといふならば、僕はその  
選択を支持するでしょう。

妹達が将来安全に暮らせるならば僕にとって願っても無いことです。

妹達は父親みたいな……憧れ、そして英雄みたいな立派な魔法使い  
になると願っているのです。

ならばこれぐらいの事なんぞ耐えなければいけません。  
全ては妹達のため……間違っていない、と思いたいですよね。

「僕は間違っていないはずですよ……帰しましょう」

僕はこれ以上は喋りたくありませんので、妹達に背を向けて、そ  
のまま歩き出します。

茶々丸さんも諦めたのか黙ってついてきます。  
まったくもって胃に穴ができそうですね。

ああ、今日は別荘でエヴァンジェリンさん秘蔵のワインでも飲み  
ましようかね。

そんな事を考えながら、後ろから聞こえる妹達の泣き声をBGM  
にしながらその場を後にしました。

ネギ・スプリングフィールドの日記8より

僕って独善者かな……（後書き）

作者「いきなりの」

ネギ「削除」

作者「そしてホニャララ」

ネギ「どうなることやら」

作者「感想」

ネギ「お待ちしております……」

昔の夢と波乱な現実（なんとこの速さだ……この速さについていけない！）

ただいま午後19時ジャスト。

いやはや皆の衆ご苦労であつた……と意味の無いことを思いながら僕はベットの所で3週間ほど過ごしています。

人生色々と言いますが、僕の人生は波乱万丈らしいですね。

あの妹達泣かしちゃったぜ事件の日の事です。

僕は気分が優れないのでエヴァンジェリンさんが隠している秘蔵のワインをバレないように飲んだつもりだったんですけどね、どうやらバレバレのようでしてね、両足骨折と肋骨を3本ほど折れちゃったんですよ。

しかも足は複雑骨折ですよ。信じられますか？

まったくもって酷いですよね……たつたあれですよ、ロマネンとかつてのを全部飲んだだけで……まったくもって快感に満ちるでしょう。

しかしながら別荘で3週間ほど過ごしていますが、暇なのでテレビゲームとやらをしているのですが、これはなかなか面白い。

という訳で3週間、寝る間を惜しんでゲームをしているのですが、僕のオススメのジャンルが2つあります。1つ目は18禁アドベンチャーゲームですね。色んな意味で燃えますよね……特に下半身の意味で！

あともう一つはあれですね、ですかね。

ふふふふ、シューティングゲームはまったくもって難しすぎますね。

3週間ほど続けていますが、Easyモードで1面のクリアできないのですよ。まったくもって困ったものです。

とまあゲームは置いといてですね。

僕はとても暇です。

エヴァンジェリンさんは学校で茶々丸さん別荘にいます。

どうしたものでしょうか？ 2ヶ月は安静にしといてくださいと茶々丸さんに言われていますからゲーム程度しかしていませんが、いかなせん、とても暇な状況に陥っているという事なのです。

実のところ、魔法でチビチビと治してるので、もう動き回っても良いのですけども、茶々丸さんが……頑固者ですね。

本当に暇です。

茶々丸さんは少し御飯を作ってくるそうなので呼べるわけがありません。

ゲームもよろしいのですが、ちょっとヤル気がおきないんだよね。まったくもってシューティングというのは奥深いものです。

……やっぱり暇だと眠くなってきますよね。

一眠りしましょうか。

おやすみなさい。

雪の日の事件が発生してから2年もすれば、僕は孤独になっていた。

僕が余りにも出来損ないだから。皆が全員、妹達に期待していた。期待に応えられない僕はなにをするにも1人ぼっちで、ただ自分が何をできるのか考え、自分に出来る魔法を覚えようとしていた。

そんな僕を皆が嘲笑っていたから。

『英雄の息子がどうしてこんな』

才能がないと駄目なの？

『英雄の娘はあんなにも優秀なのに……この子は拾われたんじゃないのか』

僕は拾われたの？

『英雄の息子は期待できない』

期待にこたえられなくてごめんなさい。

『英雄の息子なのになんでこれがきんのだ』

僕が……悪いの？ できないのが悪いの？

『はあ、まったく……君は全然努力していないのか？ 普通ならもうできるでしょう』

僕は努力してないの？ 僕は頑張ってるのに褒めてくれないの？

僕とは違ってリーゼとアミには、皆が言ってる英雄としての、父さんの娘としての、期待通りの才能があった。

だから皆にちやほやされていた。

羨ましいって言ったら嘘になるけど、それでも僕は妹達が誇らしかった。

なんにもできない僕が唯一自慢できることだから。

1度だけ魔法学園の基礎の基礎である風楯を3ヶ月間、頑張つて努力して出来るようになったと学園の教師に見せた事があつた。

僕は嬉しかったから、幻術以外で魔法を覚えれたから。

だけど現実は違つた、所詮は落ちこぼれ、誰も見向きもされなかつた。

それどころか努力してないんじゃないのかと注意された。

なんで悪いのか考えたけど、どうして悪いのか分からなかつた。

いや、姉さんと校長だけは、ちゃんと見ていてくれた。

気まずくてもお姉ちゃん。

だから頭を撫でて褒めてくれた。

それがたまらなく嬉しかった。

こんな事がずっと続いていたけど、そんなある日、1人の男性がウェールズに来たんだ。

その人の名前を高畑・T・タカミチと言つた。

なんでも日本という国からきて1ヶ月ほど滞在するらしいお姉ちゃんから聞いた。

僕に挨拶でタカミチと呼んでくれと言ってくれた。

もしかしたらだけど、此処に来て以来の友達なのかもしれない。

僕の胸はとても煩いぐらいにドキドキしてた。

タカミチが来てから1週間ほどしてからか、タカミチは酷く怒つていたんだ。

そんなに怒つていたのか分からないけど、何故か僕の顔を見て頭を撫でてくれて、いきなり僕に、僕は魔法が使えないんだと言つた。なんでそんな事を言つたのか分からなかつた。

それからまた1週間ほどしたらタカミチが僕に滝を素手で割つて



みせた。

とても凄くとても非常識だと思えたけど、魔法もなしで滝を割るのが凄くカッコよかった。

僕はそんなタカミチに憧れたのかもしれない。

だから僕はタカミチ見たいになるにはどうすればいいのかと聞いた。

タカミチは少しだけ苦笑いしながらも、守りたいものがあればと答えてくれた。

そして2週間ほどしてタカミチが日本に帰る日が来た。

僕と妹達にお姉ちゃん、あと学園長が駅に見送りに来ていた。

お姉ちゃんと学園長はまた来てと言いながら見送っていた。

妹達はタカミチが行くのを泣きながら見送っていた。

僕は守りたいものというのが分からなかった。

だから出発しようとしているタカミチに最後に聞きたいことがあると言って、僕は守りたいというものが分からない、タカミチは僕に好きな人はいるのかと聞いてきたから、僕は迷わずに妹達とお姉ちゃんと答えた。

するとタカミチが笑いながら、好きな人がいなくなるのは嫌だろうと言ってきたから、僕はただ頷く。

そんな僕を見てタカミチは、居なくなっただけじゃない人を守ってあげればいいと、それが守りたいものだと言ってくれた。

それを最後にタカミチは日本に帰っていった。

「…………結構寝てた？」

僕は首を動かして枕元にあった時計を見る。  
時刻は夜の20時13分頃。  
結構寝すぎである。

「……すっごい懐かしい夢を見た感じがする」

まったくもって昔の話であった。

布団から体を起こして、とりあえずゲームでもしましょうか……  
な……んだとっ？

「なんで……リーゼ達が此处にいるの？」

何故かすぐ近くにある椅子に座って、なにやら集中して目を瞑っています。すぐに目を開けました。

しかも杖を持って……なにをしていたんだらうか。  
謎が増えていくばかりです。

「これはなにがどうしたことっ？」

「それは私が説明してやろう馬鹿弟子」

なにやら凄く慌てているリーゼ達をほっておき、何処からともなく現れたエヴァンジェリンさんが、どうしてこうなったのかを話し始めた。

昔の夢と波乱な現実（なんとという速さだ……この速さについていけない！）

作者「ツツコミかむひいいやあああ！」

ネギ「駄目ですこの人、早くなんとかしないと」

## 作者からの報告

PCが壊れてから数日経ちました。

孝之伝とネギまの小説書き溜めしてたのですが……それがパーになったから、少しテンションが上がりきらない……っというより、まるつきり上がらないと言ったほうが正しいのかな？

一応、思い出しながら書いているのですが、まだぜんぜん完成してないです。

……もう書置きせずに、書いたやつパーツと載せようかな〜と思っていたりします。

なので、更新が少し早まります。

もう展開とかそんなの関係なしで書いて載せますので……小説が雑になりますけども、どうかよろしく願います。

## お知らせ

お久しぶりです。作者のアリストリアです。

近頃お腹の調子がよろしくないのですけども、まあなんとか元気になってます。

いやはや本当に困ったものですよ、IDとパスワードを忘れてしまっうなんて本当に俺の馬鹿としか言いようがない。

それで本題なのですけども、とあるネギのシスコン日記的なにかは更新しません。更新はしませんが、とあるネギのシスコン日記というタイトルで新しく書こうかと思っています。

プロローグからやり直すということです。

消す理由は……プロットとか消しちゃったみたいなの？（笑）

やり直しながらプロットを思い出していく感じでやりたいのです。

とまあ以上です。

これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7101o/>

---

とあるネギのシスコン日記的ななにか？

2011年11月5日11時18分発行